**№21　テーマ『人格の深さをつくる』**

**講話日2006年11月27日**

**芳村：皆さん、こんばんは。**

**一同：こんばんは。**

**芳村：本当は、こんにちはと言うてたんですけども、だいぶこうね、日も短くなってきて、こんばんはと言わなきゃならんぐらい暗いね、お時間になってきました。ようやく紅葉も盛りのころになってきてと思ってると、もう来月から冬ですからね。本当に自然の変化というのは、なんかこう、春と秋が短くて、夏と冬が長いような、そういう感じで、自然のさまざまなこの現象が荒々しくなってきたというかね、寒さも、それから暑さも極端になってきて、中間点がなくなって、非常に自然がいろんな変化を吸収する力をなくしていってるようなね、そういう感じがするんですけど。これもやっぱり、人間の自然的な環境に対する配慮というものをあまり考えないで、人間が自分たちの都合のいいような、さまざまな開発をこうし続けてきた結果、こういうこの荒々しい自然の状態になって、ハリケーンというか、竜巻がですね、いろんなところで起こったり、そういうこのことも、われわれの行為の結果、そういうことになってきたように思うんですけど。**

**まあ、でも、そういうふうなところを越えて、これからいろんな、まあ、環境のことについてもそうですけど、人間のね、人間関係の問題でもですね、やはりこの学校ではいじめがあるし、また会社でもそういういじめのようなね、ことがよくささやかれております。その意味で、もっともっといろんな面で心遣いをしながらですね、生きていかなければならない。そういうことが、まあ、要請されてるんじゃないかなと思うんですけど。まあ、今日はそういうことで、この人格の深さをつくるというですね、深いという、そういうこの魅力をどういうふうにわれわれが、自分の身に付けていったらよいのかということなんですね。これもやっぱり、プロとして仕事をしていこうと思ったらですね、なんらかの意味でお客さんからこの、まあ、さすがにプロだねと言ってもらえるようなものをですね、つくっていかなければなりません。やっぱり、客をうならせないと、なかなかこの契約も取れない、商売も繁盛しないというのが現実ですので、そういう意味で、どういう点でですね、この客を感動させるか、客に魅力を感じてもらえるか。どういうところに、さすがと言ってもらえるか。どういうところで、うーんとこう、うならせるかですね、そういうものを何かしら、プロはね、持たなければなりません。それがあって、この仕事もどんどんもらえることになりますし、また、どんどんこの次から次へとね、あの人は素晴らしいっちゅうことで、客を紹介してもらえたりなんかして、仕事がこうはかどっていく、伸びていくということになると思いますので、どういうこの魅力をもってですね、客や、あるいは仲間をですね、感動させて、そして、この一緒に仕事をしていくか。まあ、そういうことを考えていかなければならないですね。**

**で、前回は高さという、人格の高さ、高貴なる精神という、まあ、そういう魅力を、お話をしましたけど、今日は深いという魅力がどういうふうにしたらつくれるのかですね、まあ、そのことをお話をしたいと思います。で、その深いとはどういうことなのかということを短い言葉で表現するということは非常に難しいんですよね。これは国語辞典というか、まあ、大きな辞書で広辞苑とかね、辞林とか、まあ、そういうふうなこの大きな辞書で引いてもですね、なかなかこう的確な答えというのは見つからないので、まあ、例えば、広辞苑なんかで深さと引いてみるとね、どういうふうな言葉が出てくるかといったら、深さと引くと、浅くないことと書いてあるんですよね。そんなこと、当たり前やないかと。そんなん、書いてもらわんでもわかっとるわということになるわけですけど、まあ、そういうふうな、この深さとは浅くないこと、深くあることとかね。そんなもの、ド反復みたいなことが書いてあって。今度は、深いと引くとね、10項目ほどのいろんな解釈があるんですよ。で、この一つ一つ、全部それなりに当たってるんですけども、だけども、人間性において深いということはどういうことなのかということに対する、ぴったりとした回答というのは、なかなかこう見つけられない、見当たらないんですよね。で、まあ、国語辞典というのは、これは、これまでわれわれが、どういうふうなこのかたちで、深いという言葉を遣ってきたのかというですね、そういうこの過去の事実を集めて、そして、こういうふうにこれまで、この言葉は遣われてきましたというのが書いてあるのが、まあ、国語辞典の解釈なんですよね。**

**だけど、哲学というのは、物事の本質をこう探究していくような、そういう学問ですので、そもそもこの深いということはどういうことなのかということをですね、考えていくと、感性論哲学ではどういうふうに定義するかというと、このレジュメに書いてもらってあるようにですね、深さとは何かというと、深さとは、物事のより根源的で、より本質的な意味と価値を感じ取る感性である。感じ取る力である。意味や価値を感じ取る力。しかも、物事のより根源的で、より本質的な意味や価値を感じ取る力が、深さというものだというね、まあ、そういうふうに、まあ、感性論哲学では解釈をします。で、この深いというのもですね、人間の心のこの成長の一つの方向性ですので、人間の心というのは、前々からお話をさせていただいてるように、人間の心というのは、意味と価値を感じる感性であるということをね、お話をしてきました。人間、意味を感じないと、やる気にならん。価値や素晴らしさを感じないと、命に火が付かない、燃えない。意味や価値を感じるというところが、この人間の心のあり方ですので、その意味で、この心の深さというものをつくっていくっちゅうことはどういうことなのかといったら、この物事のより根源的で本質的な意味や価値を感じ取る心、感じ取る感性、それをつくっていくと、この人間性の中に深さというですね、まあ、そういうこの魅力ができてくる。深いという構造が生まれてくるということにもなるわけですね。**

**じゃあ、いったいどうすれば、まあ、そういうこのいろんな物事のですね、本質的で、また根源的な意味や価値を感じ取るという、まあ、そういうその人に深いなと感じさせるような、まあ、そういうこの自分に成長することができるのか。その方法論をですね、考えていかなければなりません。で、まあ、基本的にはですね、その深いということが、こう心のあり方として出てくるためにはですね、この外に向いておる目を自らの内心をのぞき込む、内省、自省のみに転換させるということが非常に大事であって、目が外に向いてるあいだは、なかなかその心が成長しないんですよね。だけど、目が外から内に、この向いて、そして、自らの内心をのぞき込む。反省、自省、内省の目ができることによって、この心というのはですね、このだんだんと掘り下げられていくというふうなかたちで深さというものが出てきます。そのためにはいったい何が必要なのかといったらですね、物事がうまくいってるあいだは、深さはできません。その人の人間性は非常に浅いままです。だけど、物事がうまくいかなくなってですね、今、俺の持ってる力でなんともならん。まあ、そういうふうな状態にぶつかって、スランプに陥りですね、また悩み、さまざまな問題がどんどん出てくる。まあ、そういう状態になってですね、いろいろな失敗をしたりね、そういうことを繰り返していくと、だんだん、だんだん、外に向いておる目が、自分の内心をこう見つめていくというふうなですね、まあ、そういうこの状況になっていく。すなわち、その人が悩みを、苦しみを持つ。そうすると、その悩みや苦しみにとらわれながらもですね、このどうしたもんかといろいろ考える。それが、まあ、その外に向いておる目を自らの内心をのぞき込む目に転換させるというきっかけになるわけですね。そして、この自分の心をいろいろと見つめていってですね、そして、いろんなことを思案する。まあ、そういうことによってですね、われわれはこの心を深く掘り下げていく、心を掘り下げていくというふうな、まあ、そういうこのきっかけをつかむことができます。**

**ということは、どういうことなのかといったらですね、この人間性が深いという、まあ、そういうふうなですね、人格の深さというものができてくるためには、悩みや問題にぶつからなければならないということなんですね。そこで、その深さというものをですね、高さということを前回、お話をしたことに関連して申し上げるとどうなるかというと、人格の高さというのは、どういうふうに申し上げたかといったら、人格の高さというのは、その人が生まれてから今日までに獲得してきた知識や技術や教養の量に関係するということをね、お話をしました。この関係するというのは、たくさん知識があるから人格が高いんじゃない。だけども、人格が高いというふうに言われるためには、人よりもたくさんの知識や技術や教養が必要だ。やっぱり、プロだったら、さすがにプロだねと言われるぐらいの知識量、技術量、教養の量というのを持っていなければならないと。そういう意味で、この人格の高さというのは知識の量に関係するんだけど、たくさん知識があるから人格が高いかといったらそういうわけじゃない。ということでですね、その人が生まれてから今日までに獲得してきた、知識や技術や教養の量に関係するのが人格の高さだということを申し上げたんですけど、それと同じように深さということを考えたらどうなるかといったらですね、深さというのは、その人が生まれてから今日までに体験してきた、この深さというのは体験が大事なんですよね。この命の痛みを伴った体験がなかったならば、深さというのはできない。**

**命の痛みを伴った体験というのは、悩みとか苦しみとかですね、まあ、そういうこのものが命の痛みを伴った体験というんですけど、そういう命の痛みを伴ったですね、この体験、その人が生まれてから今日までに体験してきた苦労と悩みと努力の質が、この深さに関係するというふうにですね、言うことができます。人格の深さというのは、その人が生まれてから今日までに体験してきた苦労と努力と、この苦労と悩みと努力の質に関係するというふうにですね、言わなければなりません。この苦労と悩みと努力の質に関係するっちゅうことはどういうことなのかといったらですね、苦労すれば、誰でも深くなるかというと、そういうわけじゃないということですね。だけども、苦労をしないと、深くはならん。だけど、苦労をしたからといって、みんなこの誰でも深くなれるかというと、そういうわけではない。というのがですね、この苦労と悩みと努力の質ということに、まあ、なってくるわけです。質に関係するというですね、まあ、そういうことになってくるわけであります。**

**じゃあ、この質とはなんなのかということなんですけども、どういう質の苦労や悩みや努力というものを体験すれば、人間性の中に深さというですね、そういうこの魅力が出てくるのかというとですね、この人生、どんな仕事をしておってもですね、必ずこの何回かね、何回かこのどうしようもないような問題や悩みや苦労というものにぶつかるんですね。だけど、多くの方々がですね、その苦労、問題、悩みにぶつかったときにですね、もう今、自分の持ってる力では、その問題を乗り越えられないというね、そういう状況にこう自分がなってしまってですね、そして、その問題を避けて通ろう。問題から逃げるというね、まあ、そういうふうなこの状態になってしまいやすい。そうすると、どうなるかといったらですね、苦労、問題、悩みというものにぶつかって、その問題を避けて通ろうと思うとですね、人間においては根性が曲がるんですよね、根性が。で、植物の根ならですね、根が伸びていって、この大きな岩盤にぶつかってですね、その岩盤を突き抜けていくことができなければ、その岩盤を避けてこう曲がっていっても一向に構わないんですけども、人間が問題や悩みにぶつかって、その問題や悩みを避けて通ろう、逃げようとすると、根性が曲がるんですよ。**

**で、この学校で勉強が嫌になってですね、学校でも友達が嫌になって、そして、その学校に行くのが嫌で、族になっちゃったりなんかしてですね、じゃあ、その学校が嫌だから、族になりゃ、その楽、助かるかっちゅったら、そういうわけじゃなくって、やっぱり族になっても、この下っ端のあいだはですね、その兄貴分からいろいろ命令されて使いっ走りをさせられて、苦労させられてしまう。やっぱり、族になっても、その頭にならんと、なかなかそう楽はできん。だけど、頭になったら楽かっちゅったら、やっぱり頭になったら、またそれなりの苦労があってですね、けんかやっちゅったら、みんなの先頭に立って、その相手にこう立ち向かっていかないかんという、そういうふうなことになってきて、どこまでいっても、なかなか苦労、問題というのはなくならないんですよね。**

**で、こういうことを仏教なんかでは、人生、逃げ場なしといってですね、苦労を避けて通ろうと思ってもですね、決して人生の苦労は避けて通れないです。逃げれば逃げるほど、避けようとすれば避けようとするほど、ますますですね、この生きることのつらさ、嫌さというものがどんどん肩にのし掛かってきて、逃げても逃げられない。逃げようとすれば、逃げようとするほど、その嫌なこととか、つらいことはますますですね、自分の肩に重くのし掛かってきて、ますますつらくなる、ますます苦しくなるというのがですね、人生の常だということを、まあ、仏教では言ってます。それが、人生、逃げ場なしというね、そういう言葉で表現されてるんですね。人生の苦労というのは、その悩み、問題にぶつかっていっても、これは大変な苦労なんだけど、だけども、その悩みから逃げて、その悩みがなくなるかというと、そういうわけじゃなくって、逃げたらまた、よりですね、そのつらさが自分のこの身に重くのし掛かってくるというのがですね、この常であります。ということは、まあ、逃げても苦労、ぶつかっていっても苦労、そういうことにこうなるわけですよね。**

**どちらで苦労する。逃げて苦労するか、ぶつかっていって苦労するか。逃げて苦労すれば根性が曲がる。根性が曲がるということはですね、この問題から逃げるとですね、そうすると、いろんなことが悲観的に、マイナスにですね、ゆがんで解釈してしまう。本当は親切で言ってくれてることをですね、このお節介やっちゅってですね、それをこう、それに反発心を感じるとかですね、まあ、そういうことになってきて、このいろんなことがゆがんで受け止められてしまうというふうな、そういうこの状況になっていったりするわけですね。だけど、その深さというのは、まともにぶつかっていって、その問題を乗り越えていかないと深さはできないので、その問題から逃げとったら、その状態で浅いままで、その今の状態から自分は成長できないということにこうなってしまうんですよね。ということは、逃げても苦労、ぶつかっていっても苦労、同じ苦労するなら、ぶつかっていかなきゃ損、損っちゅうと、なんとなく阿波踊りを踊ってるみたいな感じになるわけですけど、とにかくは、このぶつかっていっても苦労、また、逃げても苦労、どうせ苦労するなら、逃げてですね、根性が曲がってしまってですね、このいろんなことが正しく受け止められないというふうな、まあ、そういうこの曲がった根性で、いろんなことを受け止めてしまうというふうな状態で、成長できないで、浅いままで終わってしまうようなかたちで苦労するか。あるいは、問題を乗り越えていって、深さができていくような方向性での苦労をするか。どちらも苦労なので、どちらの苦労を選ぶかということなんですよね。**

**多くの場合、問題、悩みから逃げると、人間は堕落します。だんだん、だんだん、いろんなことがですね、正しく受け止めることができなくなってしまって、だんだん、だんだんとですね、易きに流れるというか、楽なほうへ、楽なほうへと流れていって、ついにはだんだんと自分が身を持ち崩してしまうというのがですね、この問題から逃げて、悩みから逃げて苦労するということの、まあ、結果であります。で、成長するためには、どうしてもですね、その問題にまともにぶつかっていって、その問題を乗り越えていくっちゅうことをしないと、その深さというものがなかなかこう命に出てこないんですね。そういうことを考えるとですね、この人間性の深さ、人格の深さというものをつくっていくために一番大事なこの生き方というのはですね、逃げたらいかんぞっちゅうことですね。逃げたらいかん。向かっていくというですね、まあ、そういうこの生き方が人間性を成長させる、深いという、そういう構造を命につくっていくれるということになってくるわけですね。そういう生き方をすると、だんだん、だんだん、物事のですね、そのより根源的で、より本質的なものが、どんどんこう見えてくるようになってきて、そして、ものを見る目、人を見る目の深さができてくるということになってきますので、そうすると、この今、自分ができないと思ってですね、その壁にぶつかって、悩んでおる問題でもですね、だんだんとそのものを見る目の深さができてくるとですね、これまで見えなかったものが見えてくる。新しい気付きが湧いてくる。まあ、そういう状況でですね、その問題がふっとこう乗り越えられてしまうという状況になるわけなんですよ。**

**ということは、今、問題にぶつかってですね、逃げてる人ということがあったならば、どういうことになるかっちゅったらですね、その逃げてるあいだは、だんだん、だんだんね、いろんなことがつらくなってきてですね、そして、その逃げれば逃げるほどですね、自らいろんなかたちで、問題をこうつらさを呼び寄せてしまうことになってくるので、どんどん、どんどん、周りからいろんなことが言われてですね、ますますつらくなって、追い詰められていくんですよね。だけど、もう逃げられないというですね、まあ、そういうこの状態に自分が立ち至ってですね、もう逃げられんと。俺がなんとかするしかないと思ってですね、その問題にまともにぶつかっていこうとして、逃げてる人間がぱっときびすを返してね、その問題にまともにぶつかっていくという姿勢を示すとですね、さっきまで嫌だ、嫌だと思ってですね、苦しい、苦しいと思っておったことが、きびすを返して、もう逃げられんと。もう俺がなんとかするしかないんやと思って、その問題にまともにぶつかっていこうという気持ちを決めたら、この突然ですね、その自分の肩にのし掛かっておる苦しみとか、つらさが半分にふっと減ってしまうんですよ。**

**これは長く人生を生きてる人なら、何回も経験したことがあると思うんですけど、逃げておると苦しいんですよね。だけど、もう逃げられん。俺がなんとかするしかないんやと思って、きびすを返して、その問題にまともにぶつかっていこうと思うとね、ふっとこう自分の肩にのし掛かってきておるつらさが半分に減ってしまう。半分に減ってしまうということは、逃げへんぞと思うだけでですね、もう自分の底力が湧いてきてる。自分の潜在能力が湧いてきてる。そうするとですね、このなんとなく乗り越えちゃえそうだなと思ったりなんかしてですね、そして、そのさらにどうしたら乗り越えられるかと思ってると、どんどんね、この気付きとか知恵が湧いてきてですね、そして、その問題を案外とですね、なんだ、こんなことだったのか。こんな簡単に乗り越えられるのかと思うようなかたちでですね、その問題が解決するということがよくあります。**

**その意味で、この人間が成長するというね、そういうこのきっかけとしてですね、楽をしたい、楽なほうに流れていくというね、まあ、そういうこの苦労、問題を避けるという、まあ、そういうふうなこの生き方をしてですね、そして、そのだんだんとこう自分自身が、何かこうやけになったり、何かこう他人の目が自分の心に突き刺さって、なんかこう生きにくいね、そういう状況になっていって、ますます追い詰められていくことになりやすいんです。そのときに、もう逃げとったらいかんと。俺がなんとかするしかないんやということで、その問題にぶつかっていこうとするとですね、そうすると、この自分の持ってる底力が湧いてくる。これはよく火事場のばか力と申しますけどね、もう誰にも助けてもらえんと。俺がなんとかするしかないんやと思ってしまうと、そうすると、自分でもこの不思議に思うようなですね、力がですね、命から湧いてくるという、まあ、そういうことがよくいわれます。**

**まあ、そういうことで、とにかくですね、人生というのは、何度かね、何度か、今、自分の持ってる力ではなんともならないという状況に陥ってしまうんですね。そうするとですね、それまではなんでもなかったのに、急に問題が湧いてくるし、また、そういうこの今、自分のやってる仕事でいろいろ問題を抱え始めるとですね、すると、会社でもいろいろ文句を言われるし、家に帰っても両親やですね、あるいは家族からいろいろ不平不満が出てきてですね、自分がそういう壁にぶつかってどうしようもないという状況になってくると、突然いろんな問題がばあっと周りから湧いてくるんですよね。それは自分がこの問題から逃げるというような、そういうふうなですね、弱気になってしまうと、それまで大した問題じゃなかったものがですね、弱気になることによって、いろんな問題がこの自分を苦しめるというんじゃなくって、この自分が引くからですね、その問題が出てくるみたいな、そういう構造でいろんなことを言われ始める。自分が弱気になると相手が強く出てくる。まあ、その感じでですね、いろんな問題がばあっとこう吹き出してくるんですね。そういう状態になって、ついついですね、自分もやけになって、その問題を乗り越えられないというね、そういうこの状況に陥ってしまいやすいんですけど、まあ、そういうときにですね、どういうふうに考えて、その問題というものを自分が引き受けて、それを乗り越えていくという力をつくっていくことができるかということを考えないと、深さというものができてこないんですよね。**

**まあ、とにかくこの問題、悩みは、逃げて助かるもんじゃない。問題、悩みから逃げれば逃げるほど、ますますつらさが増してくる。だから、問題、悩みというのは、自分が成長しようと思ったら、その問題を乗り越えていくという努力をする以外にないんだと。逃げてしまうと、根性が曲がって、いろんなことがゆがんで受け止められてしまって、ますます世間からはですね、いろんなこのことが言われて、ますます自分がつらくなっていく。いろんな人が自分を批判していってですね、かえってますますつらくなっていってしまう。そこで、どういうふうにですね、われわれはその問題や悩み、スランプに陥ったときに考えたらよいのかといったらですね、とにかく問題、悩みというものは、基本的に自分を成長させるために出てくるのであって、自分を苦しめるために出てきておるんじゃないんだということですね。**

**で、人間というのはですね、とにかく今、自分の持ってる力というものがあれば、その力でできることとできないことがあるんですよね。で、今、自分の持ってる力でいろいろ仕事をしておると、当然ですね、その今、自分の持ってる力ではなんともならんという状況に誰でも陥ります。今、自分の持ってる力でいろいろ仕事をしてきてですね、それは乗り越えてきたんだけども、だけども、今、自分の持ってる力ではどうしようもないというような問題が、どんどんあとに残っていってしまうんですよね。そして、いつか、その今、自分の持ってる力でできる仕事よりも、今、自分の持ってる力でできない仕事のほうが増えてきて、そしてスランプに陥ったりですね、あるいは、悩み、苦しむという、そういう状況にこう直面するんですよ。これはもう誰でもそうなんですよ。そのときにですね、どう考えるかということが、人生の非常にこの思案のしどころっちゅうことですね。今、自分の持ってる力でなんともならんという問題がどんどん出てくるということは、自分の力をもう一歩ですね、この成長させないといけないというふうな、そういうこのときに自分が直面したんだ。そこまで自分が成長してきてるんだ。自分が成長してこないと、問題にはぶつからないんですよ。自分が成長してくると、だんだんとですね、自分の今、持ってる力ではなんともならんという状態にぶつかっていって、そして、その今の力でなんともならんという状況にこのぶつかって、その問題が出てくることによってですね、その問題を乗り越える努力をすれば、必ずその問題を乗り越える力がまた自分の底力として、自分の潜在能力として湧いてきてですね、そして、またそういう問題を乗り越えていって、頑張っていけるという、そういう段階に自分が成長できるんですね。**

**だけど、またそういうこの、そこで自分がつくった、自分の命から湧いてきた力がですね、また何年かすると、その力ではなんともならんという問題にまたぶつかるんですよ。人生はその繰り返しなんですね。常に今、自分の持ってる力の限界というのがあってですね、その限界がくれば、誰でも苦しまなければならない。だけど、平凡な人というのは、今、自分の持ってる力でできることしかしようとしない。今、自分の持ってる力でできないことはできませんと言って断ってしまう。だから、成長しないんですね。多くの方々がですね、そういう状態で会社を辞めたりするわけですよ。今、自分の持ってる力でなんともならんという問題が出てくるとですね、その会社におることがつらくなって、会社を変わったら、また楽になるんじゃないか。会社を変わったら、また自分がその、今、自分の持ってる力を生かせるところがあるんじゃないかと思って会社を変わったりね、あるいは仕事を変えたりする。だけども、とにかく今、自分の持ってる力の限界っちゅうのがあるんですが、どこへいっても、必ずその今、自分の持ってる力の限界に到達すれば、また苦しくなって、つらくなって、そして、またその問題から逃げてしまうという状況で、もうその人はですね、そういう今、自分の持ってる力の限界というのが常に壁になって、それ以上、成長できない。まあ、そういう状態でですね、だんだん、だんだん、この身も持ち崩していくというかですね、だんだんとこう、世の中の変化に対応できなくなってしまう。世の中の要請に応えられなくなってしまって、だんだんとこの、まあ、不平不満を言いながら生きていくような平凡な人生で終わってしまうんですね。**

**そういうことを考えるとですね、この問題、悩みというのは、常に自分を成長させるために出てくる。今の自分の能力の限界にきたから、問題が出てきたのであって、その今、自分の持ってる力でなんともならないという問題を乗り越えていく努力をすることによって、また自分は一歩成長できてですね、またふっと伸びるというですね、まあ、そういうこの段階に入ることができるのである。問題、悩みというのは、自分を成長させるためにだけ出てきてくれておるのであって、自分を苦しめるために出てきておるんじゃない。特に今、自分が歩いておる道から出てくる問題というのは、こういう問題を乗り越える力をつくっていかないと、この道では君は成功できる人間になりませんよ。どういう努力をすれば、その道で自分が成功し、また成長していくということができるのかということを教えてくれるために、問題や悩みが出てきてくれてるんだというですね、まあ、そういう理解の仕方をしないといけません。**

**まあ、とにかく伸びる人というのは、問題を乗り越え続けていった人が伸びる人であって、問題を乗り越えれなかった人は、問題を乗り越えられなかった人は伸びないんですよ。それ以上、もう成長しないんですよね。これは、なぜその問題から逃げるというふうなね、そういうこの状況になりやすいのかといったら、幸せというのは問題もない、悩みのない状態なんだとこう思ってしまいやすいんですね。で、理性で考えるとですね、問題がない、悩みがない状態がいい状態ということになるんですけど、だけども、人間は不完全ですからですね、問題がないという状態はいつも絶対ないんですよ。いつでもとにかく問題があるんですよ。家にも問題があるし、家庭にも問題があるし、自分にも問題がある。自分は不完全ですから、問題のないときは絶対ないんですよね。だけど、問題があると、これはつらい。問題があると苦しい。だから、早く問題がない、問題のない、悩みのない状態になりたいと思う。これは、この人間が理性でですね、完全性を求めるような、そういうこの気持ちがあるからですね、その問題があるっちゅうことは、これは間違ってるんだ。悩みがあるということは間違ってるんだ。早く問題と悩みのない状態にならなければならないと考えるんですけども、だけど、現実的には、人間は不完全なんですから、問題がない、悩みのない状態なんて人生には１回もありません。１日もありません。１分もありません。常に問題と悩みを抱えてるのがね、人生であります。**

**しかも、どんな生き方をしても、どんな仕事をしても、どんな職場に行っても、どの会社へ行ってもですね、自分が不完全なるが故の問題だけは必ず出てくるんですよね。問題というのは、この自分が呼び寄せてるんですね。自分が不完全なるが故の問題だけは、どこへ行っても出てくる。問題の出てこないところを探してもですね、自分が不完全である限りは必ずどこへ行っても問題は出てくる。そして、人間が成長するということは、自分が不完全なるが故に呼び起こした、あるいはつくり出した、その問題を乗り越えていくという努力をすることが、自分が成長していくというための、その道筋なんですね。なんで問題がなきゃならんかといったら、問題がないと、潜在する能力が出てこないし、新しい気付きが出てこないし、知恵が湧いてこないんです。問題にぶつかると、知恵が湧いてくるんですよ。そして、その新しい気付きが湧いてきて、今まで見えなかったものが見えてくる。今までできなかったことが、こうしたらいいんじゃないかという知恵が湧いてきて、できてしまう。それが成長なんですよね。で、問題も悩みもなかったら、基本的には成長はありません。問題と悩みにぶつかるから、知恵が湧いてくる、気付きが湧いてくる、潜在能力が湧いてきて、人間は成長できるんです。**

**だけど、問題から逃げたいと思ってると、ますますですね、いろんな問題を自分がつくり出してしまって、呼び寄せてしまって、どんどん、どんどん、周りからね、責め立てられるような状況が出てきます。だけども、俺がなんとかするしかない。誰かに頼ったりなんかするんじゃなくって、俺がなんとかするしかないと思って、問題にぶち当たっていこうと思うとですね、問題はすっと消えていってしまってですね、そして、このある問題でも乗り越えられてしまうというね、そういう力が湧いてくるようになっております。それが命なんですよ。これはですね、このどんな人も悩み、問題は避けられませんので、本当にこう人生を力強く生きていく力をつくっていこうと思ったらですね、この問題は誰でも考えなければならないですね、重要な人生の生き方の基本原則です。まあ、とにかくこの何度かね、人生のいろんな段階において、われわれは、この問題と悩みにぶつからざるを得ない。そのときにですね、その問題から逃げるという生き方をすると、そうすると、それ以上、自分は成長できませんので、深さはできない。で、問題を乗り越えていくという努力をすることによって、この気付きが湧いてきて深くなる。それまで見えなかったものが見えてくる。それまでできなかったことが、知恵が湧いてきて、できてしまうというね、そういうこの成長を遂げることができるわけであります。**

**まあ、とにかくそこで、ぜひ考えてもらいたいのは、問題、悩みは、俺を成長させるために出てきてくれてるのであって、俺を苦しめるために出てきてるんじゃないんだというですね、そのことをぜひ考えてみてもらいたいと。今の会社、今の職場で出てきた問題というものはですね、その人がどこの会社へ行っても、必ずある段階がくると、また出てくる問題なんですよ。だから、今の会社で出てくる問題というものは、人間関係の問題でも、仕事での問題でもですね、その会社で乗り越えていくという努力をしておかないと、その人は人生において成長するという、まあ、そういうこの生き方ができません。会社が変わり、職場が変わったら、人間関係が変わったら、その問題がなくなってですね、このうまくいくと思うのは、それは楽がしたいだけのことであってですね、安逸をむさぼり、易きに流れる、そういう気持ちがあるからですね、その職場が変わったら楽になるんじゃないか。まあ、仕事が変わったら、もっとうまくいくんじゃないかと思ってしまうんですけど、だけど、仕事が変わっても、職場が変わってもですね、基本的には、今の会社で出てくる問題は、どこへ行ってもですね、必ずある段階になれば、また出てきてですね、そして、それ以上、成長できないということになるわけですね。**

**ですから、この今の会社でいろんな問題が出てきたら、それはその会社で自分がそれを乗り越えていく努力をしてないと、どこへ行っても同じなんだというね、まあ、そういうことをですね、ちゃんとわかってないといけないし、知ってないといけません。でないと、どこへ行っても逃げの人生。どこへ行っても、楽がしたい、易きに流れる、安逸をむさぼる、まあ、そういうこの弱気のですね、この生き方しかできなくなってしまって、本当の自分のですね、この底力を引き出して、自分が自信を持って人生を生きていくことができる力を、実力をつくることができません。まあ、そういうことを考えると、深さというものをつくっていくために一番大事なことは、逃げたらいかん。向かっていくというですね、まあ、そういうこの人生の姿勢である。そして、問題、悩みは、自分を成長させるためにのみ出てきてくれてるんだ。問題がない、悩みがなければ、人間は成長しない。問題や悩みがあるから、それを乗り越えることによって人間は成長するのである。そのことをですね、ぜひこのよくかみしめてですね、考えてみてもらいたいと思います。**

**まあ、とにかく問題にぶつかることによってですね、人間はこのいろいろと自分の心の中で悩むもんですからね、そのことによって、外に向かっておる目が、外へ向いておる目がですね、一転して自分の心を見つめるというね、まあ、そういうふうな状況になってですね、そして、この自分の心を掘り下げていく。そういうこのことから、いろんな気付きがね、湧いてきて、人間は成長できるっちゅうことになるわけですね。これは、まあ、歴史的に言うとですね、この人類が、人類としての深さというものをですね、人間性において獲得したのは中世の時代なんですよね。中世の時代というのは、宗教支配の時代というふうにいわれて、ヨーロッパでは神、アジアでは仏というね、まあ、そういうものを常に意識しながらですね、人間が生きた時代でした。で、まあ、ヨーロッパでは、そのキリスト教のこの支配がですね、1,000年間も続いたというのが、まあ、中世ですけど、その時代というのはですね、この人はだませても、神の目はだませないというね、まあ、そういうことから、どんなことをしてるときにでも、その神は自分を見つめてるという、まあ、そういうこの意識を持つことによってですね、この自分の心の醜さとか、自分の心の、まあ、汚れとかですね、自分の至らなさというものを感じて、そして、この自分が新しい気付きを持って成長していくということがあったのがですね、ヨーロッパにおける中世1,000年間といわれる時代でした。**

**ヨーロッパの中世というのは、紀元後３世紀から紀元後13世紀ぐらいまでの1,000年間を中世というふうに言ってるんですけども、この人間はその心の中を見つめるということをしておったもんですからですね、そのヨーロッパの中世の時代というのはあまり外の世界において、その目覚ましい文化の発展はなかったんですね。だから、その古い時代の世界史ではですね、中世は暗黒の時代というふうにいわれておりまして、ほとんど文化的に見るべきものがないとこういわれてですね、非常にその貧しい時代と考えられておったんですけど、今は解釈が違ってきまして、確かにその外の世界においてはあまり目覚ましいこの文化の発展というようなものはなかった。だけども、その外の世界において目覚ましい発展がなかった代わりにですね、そのあいだに、そのヨーロッパの世界ではですね、自分の心を深く見つめて、心の内面が掘り下げられていった時代なんだというふうにですね、この評価されるようになってきました。**

**で、なんでルネサンスから近代にかけて欧米人がですね、この素晴らしい高度な科学技術文明というものをつくり出すことができたのか。それは、中世の宗教支配の時代において、自らの内心をこの深く掘り下げていった。その自分の内心を掘り下げていった、その深さに対応する高さという高度なこの文明がですね、高度な文明をつくり出すことができたんだというふうにいわれておる。すなわち、この高く飛び上がろうと思ったら、深く屈伸しなければならない。自分の内心を深く掘り下げていったが故に、その深さに対応する高度な文明が近代でつくられたんだというふうに、こういわれてるわけですね。で、日本人のですね、日本民族の心の深さっちゅうのはいつできたのか。それもやっぱり中世の時代であって、平安時代なんですね。まあ、平安時代というのは、「鳴くよ（794）ウグイス平安京」ね。794年から鎌倉に入る、「いい国（1192）」に入るまでの、「鳴くよ（794）」だから、約800年から900年、1,000年、約300年ぐらいね、平安時代が続いたんですけども、その時代にですね、仏教が国民の隅々にまで行き渡っていって、みんな仏の心と自分の心を見比べてですね、自分の心のこの卑しさとか、貧しさとか、自分の心の汚れとか、そういうものをですね、この感じて、そして、この自分の気持ちを反省するような、まあ、そういうことをしてやっていきました。仏の心と自分の心と見比べながら、自分の心を見つめていくというね、まあ、そういうことをして、だんだん、だんだん、このいろんな気付きをですね、もって、日本人はこの深い悟りを得ることができるような、まあ、そういう状況になっていった。**

**もう１つ、日本人が深いこの心を持つことができる、心の民族といわれてですね、血の通った温かな心といわれるような、深い人情を持ったですね、そういう心をつくることができたのは、短歌、和歌をつくるというね、そういうこの活動を多くの人がしておったからですね。で、この短歌というのはどういうのかといったら、これは、まあ、短歌で有名なのは『万葉集』とか『古今集』、『新古今集』という、この３つが、まあ、３大短歌集でですね、和歌の、まあ、集大成みたいなもんですけども、その『古今集』の序文を書いた紀貫之というね、この序文を書いた人の言葉から考えますとですね、あの『古今集』の序文の書き出しの言葉にどういう言葉があるかというと、「やまとうたは人の心を種として万の言の葉とぞなれりける」というですね、そういうこの文章から始まってですね、「やまとうたは人の心を種として万の言の葉とぞなれりける」。短歌とか俳句というのはですね、自分がこの心で感じたことをどう言葉で表現しようかと思っていろいろ苦労する。まあ、そういう文学なんですよね。ですから、自分の本音とか、実感というものを理性で見つめ尽くすというね、まあ、そういうことをします。そして、どういうふうにこの、どういう言葉で表現したら、自分のこの本音が、実感がぴたっとこう表現できるだろうか。まあ、そういうことで、いろいろ自分の心を見つめるんです。そのことによって、だんだんと日本人は自分の心を見るというね、自分の心を見つめる、内省、自省、そういうこの力をですね、つくっていきました。**

**そして、この平安時代300年間のあいだにですね、この日本人は民族の魂に到達するところまで自分の心を深く掘り下げていく。民族の心を深く掘り下げていくという、まあ、そういうことができたんですね。で、それがためにですね、この平安時代が終わって、鎌倉から室町に至って、その日本民族の独特のこの精神性、魂がですね、吹き出してくるような、そういう状況で日本独自の文化をつくることができるという、そういう状況になっていきました。で、平安時代の末まではですね、日本の文化というのは、多くこの中国大陸や朝鮮半島からこの来たものを学ぶというふうなかたちで、日本の文化はこう成長していったんですけど、鎌倉時代になるとですね、独自の、日本というこの国独特のですね、さまざまな文化が急につくられるようになってきたんですね。どういうことなのかといったら、この鎌倉時代に入ると、仏教なんかでも、日本仏教といわれるものが出てきてですね、それまでは平安時代には、まだ中国や韓国から学んだことをやっておったんですけど、その平安時代から鎌倉時代になっていくとですね、そうすると、その親鸞、法然ね、日蓮、道元、一遍といわれるような、まあ、本当にこういろんな個性のある僧侶がたくさん出てきてですね、独自の経典をつくり出して、それが、まあ、日本仏教というふうにいわれるようになりました。日本人独特の仏教解釈によるですね、まあ、そういうこの宗教がたくさんこうできてきたんですよね。**

**また建築なんかでもですね、皆さん方、ご承知のように、書院造りというね、いわゆる武家が住む屋敷としての原形である書院造りというですね、まあ、そういうこの独特の簡素な美学といわれる建築がつくられました。で、これが、まあ、のちのち茶室のですね、様式に変わっていくんですけども、そういうこの書院造りといわれるような、世界中どこにもない独特のですね、この、まあ、構造っちゅうか、デザインを持ったね、そういうこの家がつくられました。これもやっぱり、この日本人が自らの魂に届くところにまで自分の心を見つめていったが故に、日本民族独自の個性がにじみ出てきて、そういうこの日本人独特の建築様式というものが生まれ出ることができたっちゅうことなんですよね。**

**また仏師といわれて、まあ、木でですね、仏様を彫るような、まあ、そういう仏師といわれる方も、鎌倉時代から活躍をしてですね、そして、その、まあ、中国や韓国から入ってきた仏様というのは信仰の対象としての仏様で、非常にこの粗雑な仏様だったんですけど、運慶、快慶といわれる仏師がつくった仏さんというのはですね、本当にこう個性的な表情を持った仏様で、しかも、その着ておるもの、衣でも、その衣のひだまでちゃんとこう描き出されるような彫刻がしてあって、そして、その信仰の対象を越えて、芸術作品といわれるような、まあ、そういう仏様をつくることができました。これもやっぱり平安時代にですね、自らの内心を見つめ尽くして、繊細な感性というものをこの平安時代に日本人がつくっておったが故に、その繊細な感性に基づいてつくられた仏様であるからですね、その粗雑な中国や韓国から入ってきた仏さんとは違って、本当にこの繊細なところまで、表情や衣なんかをこう描くようなね、そういうかたちでのこの仏像がたくさんつくられました。仏師といわれてね、木彫の木に彫り込んだ、そういうこの仏様ですけども、本当にこう素晴らしい表情を持ったですね、仏様、芸術作品といわれる仏様がつくられました。**

**刀なんかでも、日本以外の国にある刀は全部、人を斬るための刀なんですけど、日本刀といわれるようなですね、このものは、鎌倉時代の末期につくられて、まあ、有名な正宗の名刀というような、そういうものですけど、日本人が鍛えた、日本人が鋼を鍛えてね、鉄を鍛えて鋼にしたあの日本刀というのは、人を斬るための刀という領域を越えてですね、その鞘を払って、このぱっと目の前にその刃をね、持ってきて、その鍛えられた鋼のですね、その波形、刃形、あるいはその輝きを見ておるとですね、自分の心が研ぎ澄まされていって、人間性がこの、まあ、しっかりしてきてですね、その刃を見ることによって、自分の気持ちがこう、まあ、筋金が入るというか、ピンとこう緊張したですね、たるみのない気持ちになって、そして、その刃形を見つめてるだけで心が洗われるというふうなですね、まあ、そういうふうな力を持った刀剣が正宗によってつくられました。まあ、それを日本刀というんですけど、その意味では、日本人だけがですね、その芸術作品としてのですね、まあ、そういうこの刀剣をつくったというふうに、まあ、言うことができます。これもやっぱり、日本人の繊細な感性という、平安時代につくられた、そういうこの細やかなですね、心遣いというものが、あらゆるこの作業、あらゆる行動、あらゆるこの活動に反映されて、そういうふうなものができてきたわけであります。**

**そういう中からですね、わびとか、さびとか、幽玄とかね、まあ、そういうふうな独特の日本人の心が出てきまして、で、そういうものの表現として、茶道とかね、華道とかですね、あるいは、その能、狂言といわれるような、そういう芸能も出てきましたし、その延長線上で、江戸時代になればですね、この歌舞伎だとか、浮世絵だとかですね、まあ、そういうふうなこの日本にしかない独特の文化というのが出てきました。そういうふうに日本人独特の文化を日本人がつくり出すことができたのは、実はこの中世のあいだに自分の心の内面を見つめ尽くしたというですね、まあ、そういうことによって、民族の魂に到達するところまで自分の心を掘り下げていった。それがために、魂から湧き上がるものとして、日本民族独特の文化がですね、鎌倉からこの室町にかけて湧き出てくるというふうな状況ができたんだ。まあ、これはヨーロッパにおけるですね、近代、そのルネサンスから、その近代に至って、高度な科学技術文明がどうしてこの発達し、構築されたのか。それは中世1,000年間のあいだにヨーロッパ人が自分の心の内面を深く掘り下げていったが故に、その深さに対応する高度な文明、科学技術文明ができたんだといわれるのと同じようにですね、日本人も中世の時代に自らの内心を掘り下げていった、内面を見つめていった。その魂に届くもので自分を見つめていった。その深さに対応するものとして、この鎌倉から江戸時代にかけてですね、高度なその独自の素晴らしいですね、その日本文化をつくり出すことができたんだというふうに、まあ、言うことができます。**

**そういうことを考えると、本当に自分の個性を輝き出させようと思ったならばですね、われわれは、この外の世界に目を奪われることなくですね、自らの内心をのぞき込む。内省、自省という、そういうこの自分を反省するというかですね、自分自身を見つめてみる。そのためには、問題、悩みを抱えてですね、いろいろと自分が反問する。まあ、そういうことがですね、ものすごくこの自分の成長のために、また自分の個性を輝き出させるために大事なプロセスなんだというふうにですね、言わなければなりません。で、そういうこの自分自身が自分の内面を見つめてみるというですね、そういうきっかけを与えてくれるのが、この苦労であり、悩みであり、問題にぶつかるというね、そういうこのチャンスというか、そういうことがあって、初めてわれわれは自分の内心をのぞき込むというふうな、そういうこの力を獲得するのである。そういう意味で、われわれは、問題、悩みにぶつかっても、それを嫌なものとして避けようと思ってはならない。それがあって初めてわれわれは、この人間性においてですね、自分を軽薄な人間から深い心を持った人間に自分自身を成長させることができるのであり、また、問題、悩みにぶつかることによって、今の力をはるかに超える、この新しい力を自分の命から引き出してくることができるというですね、まあ、そういうことになってくるんだ。問題、悩みにぶつからなければ、命に潜在する能力は出てこない。本当の自分は出てこないということですね。**

**これは前もお話をしたことですけども、われわれは何かしようとすると、まずは理性でね、今、自分の持ってる力である理性でなんとかしようとするんですけど、だけども、理性というのは、他人がつくった知識や技術を学習して覚えて、自分のものにしてしまって、そして、いかにもそれを自分の力のごとく考えて使って生きてるというのが、まあ、理性で生きてる人間の姿です。だけど、理性の実態は、他人がつくった知識や技術を覚えたんだ。ということは、理性はパクリであってですね、本当の自分の力とは言えない。理性はパクったのであって、他人の力をこの学習して覚えてですね、他人のつくったものを自分のものとして、この使ってるというふうな、そういう段階なんですね。だけども、今、自分の持ってる理性能力が役に立たなくなって、今、自分の持ってる力でなんともならんという状況にぶつかるとどうなるかっちゅうとですね、今、自分の持ってる力ではなんともならん。理性ではなんともならん。そういう状況にぶつかりながらもですね、だけど、このままでくたばってなるものか。このままでは終われない。そういうふうな気持ちで頑張ってると、今、自分の持ってる力でなんともならんのだからっちゅうことでですね、その命に潜在する能力が湧いてくるという順番がくる。で、この命から湧いてきた潜在能力こそ、まさに俺の命から出てきたんだから、誰のものでもない。俺のもんだ。そこから本当に俺の力で生きる人生が始まるんだっちゅうことですね。**

**理性で生きてる限りは借り物の人生だ。理性ではなんともならない。理性ではなんともならないというですね、そういう状況に立ち至って、だけど、なんとかしたいと思って頑張ってると、本当の自分の力、俺だけの力という自分の命に潜在する力が湧いてきて、そして、その問題を乗り越えさせてくれる。そこから本当に俺の力で生きる人生が始まる。だから、個性的な仕事ができる。個性的な生き方ができる。個性ある能力が、この出てくるというね、まあ、そういう状況にこうなるわけであります。で、命から知恵が湧いてきたり、気付きが湧いてきたり、潜在能力が湧いてくると、命の根底からこう湧き上がってくるものですから、それがこの人間性の中に深さという構造をつくってくれるんですね。だから、深い人というのはですね、その知恵や気付きや潜在能力が湧いてくるという、まあ、そういうこの力を持った人がですね、深さというものを人に感じさせるんですね。みんなが困って、どうしようもないなと言ってるときにですね、こうしてみたらどうやとこう言えるというね、まあ、そういう力っちゅうのを、知恵というんですけど、知恵者というのはそういうもんですけど、まあ、そういうことを言うと、なんてこの考え方が深いんだというね。みんなが困ってるときにこうしてみたらどうやと言えるもんですから、みんな、感じて、感動して、なんて深いんやろうなと、そういうことで、その深さをみんなが感じてくれることになるわけですよね。**

**まあ、その意味で、この深さというものをつくっていく。そのためにはですね、この苦労、問題、悩みから逃げないで、今、自分の持ってる力ではなんともならんという状況があっても、そこで諦めないでですね、だけど、なんとかしたい。問題、苦しみ、悩みは俺を成長させるために出てきてくれてるんだ。これを乗り越えないと、俺は成長できないんだというですね、そういうふうに考えて、その問題を乗り越えていくための努力をする。逃げない努力をする。そうすると、必ずですね、その今、自分の持ってる理性ではなんともならんのだからということで、命から知恵が湧いてくる、気付きが湧いてくる、潜在能力が湧いてくるという、そういう状況になって、人間はこの自分でも驚くようなね、まあ、そういうこの成長ができるということに、まあ、なってくるわけですね。**

**で、問題、苦しみ、悩みというのは、これは自分から欲しいと思って獲得するもんじゃなくってですね、問題、苦しみ、悩みというのは、求めずしてやってくるもんなんですよね。求めずしてやってくるということは、それはこの人智を超えた天の計らいというかですね、その人智を超えたところからのですね、まあ、そういうこのものとしてやってくるんだ。そこにはこの人間の作為を超えたですね、天の計らいがある。人智を超えた計らいがある。問題、苦しみというのは、この神仏が、天が、宇宙が、歴史が、自分に与えてくれるですね、まあ、そういうもんなんだということをですね、われわれは考えなければなりません。実際問題、人間の歴史というのは、今の社会にある問題を乗り越えることによって、新しい歴史がつくられ、新しい時代がやってくるんですよね。命というのは、宇宙の摂理がつくったもんですけど、その宇宙の摂理によって命がつくられたということは、この地球上の命っていうのは、この宇宙から言えば、子なる命であって、宇宙は母なる命だ。命を生んだものを母だとすれば、宇宙は母だ。そして、われわれのこの生物は子なる命だ。**

**母なる命である宇宙は、子ども、自分が生んだ子どもである生命を進化させるために、環境の激変という問題を与えるんですね。環境の激変がなかったならば、命は進化しない。だから、その環境の激変がない、ガラパゴス諸島に住んでおる動植物は、生きた化石といわれてですね、このずっと古い時代のですね、その命のかたちをそのままに今日まで受け継いでおる。環境の激変があって初めて命は進化するんだ。成長するんだ。そのことを考えれば、この環境の激変という、うっかりすれば全生物が絶滅するかもしらんというほどの大きな問題もですね、実はこれは母なる宇宙が自分の生んだ子どもたちを成長させるために、この与えたですね、愛の試練だというふうに言わなければならない。環境の激変すら、愛の試練。命を成長させるために母が与えた、この課題だというふうにですね、言うことができるわけであります。そういう意味で、会社の中でいろんな人間関係の問題が出てくるでしょうし、また仕事上の壁にぶつかることもあると思うんですけど、だけども、それも全部ですね、自分を成長させるために天が自分に与えてくれた愛の試練だ。自分を成長させるためにその問題は出てきてくれてるんだ。まあ、そういうふうなですね、この意識でそれを受け止めていかなければならない。そのことをですね、われわれは自覚する必要があります。**

**だけど、このどんな問題からでも逃げたらいかんというんじゃないんですよね。人間は不完全ですから、人生には逃げなければならない問題もあるし、逃げてもいい問題もある。だけども、絶対逃げたらいかんというのはですね、これは自分の意志と決断で自ら選び取った人生の道筋から必然的に出てくる問題、悩みからは逃げたらいかん。自分が選んだ道から出てくる問題から逃げるということは、これは自分の決断への裏切りですからね、卑怯やと。自分が選んだ道から出てくる問題というのは、俺がやらんで誰がやるんや。人に替わってもらうわけにはいかんという問題ですからね。しかも、自分が選んだ道から出てくる問題というのは、こういう問題を乗り越える力をつくっていかんと、君はこの道では成功することはできないよ。どういうふうな努力をしたら、その道で成功できる人間になるのか。そのことを教えてくれるために出てきてくれてるのが、自分が選んだ道から出てくる問題の意味なんですよね。だから、まあ、自分が選んだ道から出てくる問題からは逃げたらいかん。まあ、それが、まあ、本筋の生き方ですよね。**

**だけども、いかに自分が選んだ道から出てくる問題、結婚とかね、就職とか、この自分が選んだ道から出てくる問題とはいえですね、全部が全部、逃げたらいかんというのは、これはやっぱりちょっときついかもしらんと。だから、最終的にはどうなのかといったらですね、常に人間はこういうことからは、俺は絶対、逃げんぞというね、何かしら、逃げない何かを１つでも持っておったら、もうそれでその人の人生は大丈夫だ。その方向性へは成長できるからですね。そして、人間は自分が逃げなかった、その問題を乗り越えて、自分の道をつくっていく。そのことによってですね、この、まあ、自分の個性あるですね、まあ、そういうこの人生を生きていくことができるわけですね。とにかく逃げなかった問題の方向性へとしか、人間は成長できない。常に何かしら、その逃げない何かというものを１つ持っておったら、人生は大丈夫だ。そういうふうにですね、この言うことができる。そして、それ以外のものは、人に助けてもらったらいい。こういう問題からは、俺は絶対に逃げんぞというものさえ持っておったならばですね、そのほかの問題は、人に助けてもらってもいい。だけど、人に助けてもらったら、自分の実力はできないんですよね。だけど、やっぱり社会というのは、会社というのもそうですけど、お互いに助け合ってですね、足らんところはお互いに助け合って、教え合ってというのがですね、社会であり、会社であり、家庭ですから、そういう意味で、この助けてもらってもいい。だけども、この人間が成長するためには、こういうことからは絶対に逃げんぞという、逃げない何かを１つは持っていないと、人間は成長しないということですね。**

**とはいってもですね、この逃げないということだけでは深さはできないんですよね。逃げへんぞといって、突っ立っておっただけでは、張り倒されてしまったら一巻の終わりなので、逃げないでどうするか、どういうことをするかということが次の課題なんですよね。実際問題、この逃げないでその問題を乗り越えていったとき、初めて深さというものが実力として自分の命に宿るのであって、逃げへんって、突っ立っておっただけでは、まだ問題は残ってるんですからね。だから、まだ本当の深さはできません。だけど、問題を乗り越える力が湧いてくるためにはどうしても逃げないということが、まずは要求されるんですよ。なぜかといったら、逃げたいという気持ちがあったら、もう自分の底力は出てこない、潜在能力は出てこないんですよね。誰かに助けてもらいたいという依頼心や依存心があったならば、その分だけもう自分の力は出てこないんですよ。誰にも助けてもらわん。俺がなんとかするしかないんやという、そういうこの思いで問題に立ち向かっていこうとするとき、自分の底力は湧いてくるのであって、依頼心や依存心があれば、その分だけ自分の力は出てこない。逃げたいという気持ちがあったら、もう自分の力は出てこない。**

**だからね、わずかね、わずか500万円の借金でもね、首をつって死んでしまう人間もおる。だけど、500億円でもね、一代で返してしまう人間もおるんですよ。どこが違うんや。それはどういうレベルでもういかんと、その人が思うかなんですよね。わずか500万円の借金でもですね、その依頼心や依存心が出てきて、自分ではなんともならんと思ってしまうとですね、もう自分の力は湧いてこないんです。湧いてこないもんですから、どんどん追い詰められていって、返せなくなるわけですね。だけど、500億円でもですね、このままくたばってなるものか。俺をばかにしたあいつたちを必ず見返してやるんやというですね、まあ、そういうこのコンプレックスというか、そういう激しいですね、苦しみに負けないですね、そういう必ずあいつたちを見返してやる。このままでくたばってなるものか。そういう思いのほうが、苦しい、つらいという気持ちよりも勝ってくるとね、人間はどんな問題でも乗り越えられてしまうんですよ。**

**問題を乗り越えることができるか、乗り越えられないかは、苦しいという気持ちと、このままでくたばってなるものかという気持ちのどちらが勝るかなんですよね。苦しいという気持ちのほうが勝ってきたら、もうその問題は絶対乗り越えられませんし、底力、潜在能力は出てきません。このままでくたばってなるものかという気持ちが出てくると、それが苦しいという気持ちよりも勝ってくると、自分の底力は湧いてくるし、まあ、そのことによって、その問題は乗り越えられてしまうというね、結果が出る。**

**で、これがですね、500億円でも返してしまうというね、そういう人間になるかならんかのですね、大きなこの心の持ち方というか、その自分の、まあ、心の持ち方の違いなんですよね。まあ、そういう意味で、問題を乗り越えていこうと思ったら、まずはですね、逃げたらいかんというこの気持ちが出てこないと、自分の底力は出てきませんから、問題を乗り越えられないんですよね。で、人生というのは、逃げれば逃げるほどですね、ますますね、どんどん、どんどん、問題が出てくるんですよ。逃げへんと思ってしまって、問題に立ち向かっていくと、問題はだんだん、だんだんね、消えていくんですよ。まあ、これもね、本当にこう不思議なものでね、やっぱりその逃げん、逃げんぞと思って、この自分が問題に立ち向かっていくとですね、その力によって、自分を外から責めてくるね、まあ、そういうこの自分を非難するような、そういう気持ちがすっと引いていってですね、そして、この自分が問題に立ち向かっていくという、そのことに対するですね、その評価、あるいは、まあ、そういうこの気構えというものにね、周りは感じて、そして、その人を責めるというね、そういう気持ちがなくなっていくんですけど、その人が弱気になっていってですね、苦しいという気持ちを表に出してくるとですね、どんどん、どんどん、ますますその人の弱気に付け込んで、いろんな問題がね、周りから噴出してきてしまうというね、まあ、そういうことに人生はなります。**

**で、私なんかでも、これまでの人生、考えたらですね、あんとき、あのつらさに負けとったら、今の俺はないな。あれから逃げんとやってきたから、今の俺はあるんやなという、そういうことがいっぱいこう過去を振り返れば出てくるんですよね。で、どういうふうにして私は、その年代、年代の問題を乗り越えられてきたのかというとですね、自分の中に逃げたいという気持ちが出てきたときにですね、自分自身で、自分に対して、おまえ、逃げるんかと聞くわけなんですよ。おまえ、逃げるんかと、自分に聞いてですね、で、逃げとったら、なんか情けないと思うんでね、いや、逃げへんと言ってですね、その問題を避けずに、まあ、ぶつかっていったというのがですね、自分の生き方なんですよね。だから、何かしらね、その問題から逃げないで、その問題に立ち向かっていく力をつくっていく自分なりのその方法論っちゅうか、自分を励ます言葉とか、やり方というものをですね、持ってないとね、なかなか人生は続きません。**

**まあ、そのためにね、その問題というのは、自分を成長させるために出てきてくれてるんやという解釈もそのために必要なんですよね。また人生というのは、問題がない、悩みがない状態を求めてはならないと。問題と悩みはなくならないんや。生きるということは、問題と悩みを乗り越え続けることなんや。問題と悩みを、努力したら、問題と悩みがなくなるんやないと。常に問題はあるんや。家にも問題はある。自分にも問題がある。会社にも問題がある。常に問題はあるんや。もし問題がないと思ったら、それは見えてないだけなんや。あっても見えてないだけなんや。そのことをですね、わかってないといかん。まあ、いろいろとですね、その問題に負けない、その問題を乗り越えていくために自分を励ます方法論っちゅうのはいろいろありますよ。何かしらそういうことの中でね、自分の生き方を支えてくれるものというのを持ってないと、人生はなかなか問題に負けないで生き抜いていくということは難しいです。**

**仏教の悟りなんかでもですね、仏教の悟りの一番根底にある悟りというのはなんなのかといったら、という悟りなんです。、一切というのは、一切合切というね、一切で、一という字と切るという字をね、書いて一切ですね。皆苦というのは、みんな苦しみと書いて皆苦という。一切がみんな苦しむ、ね。これが仏教の悟りの根本なんですよ。で、仏教の悟りというのは４つの段階を踏んで成長することになってましてね、まあ、これは、あのね、それを仏教では四法印とかね、４つの悟りと書いて、４つの諦、４つの悟りと書いて四諦とかね、あるいは四法印っていうんで、これは大きな辞書で帰ってから引いてもらったね、その内容は出てきますけど。この仏教の悟りって、４段階を踏んで成長することになってましてですね、それを４つなので、四諦、四法印、まあ、そういう言い方を、四法印というのは、４つのね、法律の法という字と、それから印鑑の印でね、四法印というんですよね。４つの悟りがある。４つの悟りの一番根底になければならない悟りが。その上が、その上がこの、その一番最後がといってですね、まあ、これは仏の境涯といわれるもんですけど、人間がこの順番に悟りを開いていく順序が、一番根底にあるのが、その次は、その次は、そしてこのとこう悟りの境地が成長していくんですね。**

**だけど、まずとにかく一番根底にという、この悟りがなかったら、この始まらないというのがね、この仏教の最も根本の考え方なんですね。というのは、これはなんなのかといったら、その一切がみんな苦しみなのでね、人生とは苦しみなんだ。人生とは苦しみなりというのがですね、根本の悟りなんだ。それをちゃんと悟ったらどうなるか。どんな苦しみがきてもですね、人生とは苦しみなり。どんな苦しみでも、それが人生じゃないか。それが人生じゃないかといってですね、苦しみから逃げないで、それを自分が受け止めて乗り越えていくことができる。まあ、ちょうど『おしん』ちゃんみたいにですね、そのどんな苦しみでも、このぐらいへっちゃらだわと言って乗り越えていけるという、そういうことになる。それが人生とは苦しみなりというね、そういう悟りを持った人間の生き方であって、人生は楽しくなくっちゃと思ってし**

**まうと、ちょっとしたつらさがものすごく苦しくなるわけですよね。だから、その苦しみから逃げないというね、そういう気持ちをつくっていくために、仏教ではという、人生とは苦しみなりということをまず悟らないかんというのが根本にあるわけですよ。**

**というのは、具体的になんなのかといったら、それは四苦八苦というね、この四苦というのは生老病死といって、生きる苦しみ、老いる苦しみ、病の苦しみ、死ぬ苦しみね。これを生老病死といって、四苦というんですけど。こういうものは誰も避けることができない。誰も避けることができないですね、人生の苦しみは８つあるというんで、四苦八苦というんですね。四苦というのは生老病死で、それ以外にまだ４つの苦しみがあって、全部で８というのが四苦八苦なんですけどね。四苦八苦するということと、まあ、日本語でも言いますけど、四苦八苦というのは仏教からやってきた言葉で、人生とは苦しみを乗り越え続けることが人生なんだというね、そういうことも仏教では教えてるわけですね。まあ、６時半になりましたので、いったんここで切って、ちょっと10分間、休憩を入れてから、また次の話をします。どうもありがとうございました。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、後半の話に入ります。まあ、とにかくこの問題と悩みが出てくるということはですね、今、自分たちの持ってる力でなんともならんという状況に立ち至ったということなんですけど、それは新しい成長の段階に入ったんだというね、そういうこのことを意味する、この現象なんですね。すなわち、今、自分の持ってる力でなんともならんということは、そういうところまで成長してきたんだっちゅうことですよね。そして、今、自分たちの持ってる力でなんともならんということは、その新しいやり方を考えないかんという段階に入ったんだっちゅうことですね。まあ、とにかくどんな会社でもね、みんなそういう段階を何度か踏んで、飛躍的にどんどん成長していくことになるんですよね。だけど、その問題にぶつかったときに、今までのやり方でいいんだっちゅうことで、とにかく今までのやり方にこだわって、今までのやり方以外のやり方を考えられなかった会社はそこでつぶれるんですよ。とにかくは、その今、自分たちの持ってる力でなんともならんという状況に立ち至ったっちゅうことは、そこまで成長してきたんだと。今度は新しいやり方を考えていかないと、そこからもう一歩、成長できない。成長のときが来たんだ。**

**だけども、成長するっちゅうことは、新しいやり方を考えていかんないかん。今までのやり方だけではいかん。今までのやり方も、もちろん忘れてはいかんのですけど、それだけではいかん。もっと高度なですね、もっと違ったやり方を考えていかないと、そうしないと、新しい成長の段階に入れない。そういう飛躍のですね、飛躍的に成長していくために、問題が今、与えられてるんだ。問題には答えがあるんだ。答えのない問題はないんだ。だから、その問題というものを自分たちを成長させるために、そういう状況がつくられたんだ。出てきてくれたんだ。だから、その問題に答えを出していってですね、そしてこの飛躍的に成長していかないかんという気構えにならないと、問題が出てきたからって、がっくりしてるようじゃ、話にならん。問題が出てくるっちゅうことは、飛躍するときを迎えた、成長のときが来たんだ。新しい成長の段階に入るんだ。わが社の新しい、この１ページが始まるんだ。まあ、そういうふうな気持ちでこの問題というものを与える。求めずやってきたということは、その会社を、その人を発展させるために、母なる宇宙が愛を持って与えてくれた問題なんですからね。だから、問題が出てきたっちゅうことは、その新しい答えを持って、この頑張っていかなきゃならない、そういう段階にまで自分たちは成長してきた。そこまでやってきたんだ。まあ、そういうふうなですね、気構えを持つ必要があります。すべての会社はみんなそういう段階を乗り越えて発展していくんですよ。**

**そのことのためにですね、このみんなが力を合わせてですね、お互いにその営業力のレベルアップを図るためにですね、お互いがこの知恵を出し合って、こうしてみようか、ああしてみようかで、お互いに話し合いながらですね、さまざまな仕事の仕方のレベルアップを図り、また同業他社がやってない、新しい営業方法とかですね、そういうものをこうみんながいろいろ勉強してですね、考え出して、今度はこういうやり方でみんなやってみようかといってですね、みんながそのだんだんとこう、お互いに話し合うことによって、やり方をレベルアップさせていくというね、まあ、そういうふうなことをやっていかないといけません。で、一人勝ちでですね、うまく営業成績が上がってる人が、自分のやり方を同僚に教えないでね、一人勝ちでやってたんじゃ、会社は発展しません。みんながお互いにその力をですね、成長させ合っていかないと会社は伸びません。一人勝ちでは絶対に会社は駄目になります。みんながお互いに助け合いながらね、力を合わせ合いながら、お互いの能力を成長させてですね、そして、このいろいろ営業分野をですね、お互いにこうシェアしながらですね、分け合いながら、お互いに侵し合わないようにですね、ちゃんとこう領域を分けてですね、営業をやっていく。まあ、そういうふうな、お互いが成長し合いながら、お互いが助け合いながら、会社を発展させていくようなシステムをつくっていく必要があるわけですね。まあ、とにかく問題を恐れたらいけません。問題というのは、あらゆるものを成長させるために出てきてくれてるんだから、問題があることは幸せなことで、問題がなかったら会社は発展しませんからね。問題があることを恐れたらいけません。問題が出てきたっちゅうことは、新しい発展段階に入ったということなんだということをね、忘れたらいけません。**

**で、そこで、じゃあ、どういうふうにすればですね、その問題を乗り越えてですね、そして、この人間性の深さをつくっていくことができるのか。どうすれば、新しい気付きが湧いてくるのかね、その方法論をね、次に考えなきゃならないんですね。で、問題を感じるのは感性です。だけども、答えを出すのは理性です。だから、理性の使い方ということをちゃんと覚えないと、この問題に、悩みに、答えは出ません。で、理性の使い方というのはどういうことなのかというとですね、この理性という能力は客観性と普遍性の能力である。まあ、これは理性というものをですね、その理性の働き方というね、形式面から規定した場合に言えることなんですけども、理性は客観性と普遍性の能力である。感性論哲学ではですね、理性というものをこの内容面からね、内容面から考えて、内容面から規定して、理性は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力である。だけども、理性はよりよいことを考えることができるところにその積極的な価値がある。まあ、これはその感性論哲学による、この理性を内容面から規定した言葉ですけど、理性を形式面から規定するとどうなるかといったら、理性は客観性と普遍性の能力であるというね、まあ、そういう規定の仕方をしないといけません。**

**ということは、理性という能力は、客観性と普遍性の能力だということをちゃんとわかって、そういう使い方をしないと、理性は答え、正しい答えを出せない。そういう能力なんだということですね。ということは、具体的に言ったらどういうことなのかといったらですね、客観性っちゅうことは、この外から見る、対象化して客観的に外から見るということが客観性っちゅうことですね。そこから普遍性というのは、普遍的っちゅうことは、みんなに共通してるということを意味しますので、普遍的ということは、全体を見るという、そういうこの立場が理性に与えられないといけない。すなわち、理性という能力は、物事を客観的に全体を見るという立場に理性を立たせてあげないと、理性は正しい回答が出せないんだということを知ってないといけないということですね。**

**で、具体的にはどういうことなのかといったらですね、この深い森の中に迷い込んでしまったとする。深い森の中に迷い込んでしまった状態で、どちらのほうに進んでいったら、その森から早く出られるか。どんだけ考えてもね、深い森の中に迷い込んだ状態でいくら考えても、答えは出ないんですよ。当てずっぽうで、あっちへ行ってみようか、こっちへ行ってみようかって、いろいろ考えてるうちにね、野垂れ死にして死んでしまう。じゃあ、どうしたらその正しい答えが出るのかといったらね、深い森の中に迷い込んでしまった場合には、その森の中に生えておる、一番高い木のてっぺんに登るんですよ。まあ、森の中に生えておる、一番高い木を探してるだけでも死んじゃうじゃないかっちゅう話もあるんですけどね、まずそんな高い木のてっぺんに登れるんかっちゅう話もあるんですけどね、一応、その森の中に生えておる、一番高い木を探したとして、その一番高い木のてっぺんに登ったとしてね、どうなるかといったら、森の中に生えておる一番高い木のてっぺんから森全体を外から眺めるならばね、そこにおるんやったら、こう行ったら外に出られるって一発で答えが出るわけですよ。これが理性の使い方なんですよ。**

**だけど、ほとんどの人は、悩みを持ち、苦しみながら考えるんですね。だから、答えが出ないんですよ。で、八方塞がりになるんですよ。で、悩んで、苦しみながら考えるとね、悲観的になって考えるもんですからね、自分がこれからしようとすることが、全部、マイナス面しか見えないんですね。こんなことをしたら、あいつに迷惑が掛かるしな。こんなことをしたら、またこんな問題が出てくるしな。こんなことをしたら、隠しておきたいこと、わかってしまうしな。もうどうしようもないな。俺が死ぬしかないかというようなね、そういう悲観的な答えにどんどん、どんどん、こういってしまうんですよ。だけど、その自分で悩みながら考えて、もう死ぬしかないといって、答えを出してですね、で、友人に俺はもう死ぬしかないんやって言うたら、友人はどう言うかって、友人っちゅうのはだいたい、そうか、じゃあ、死ねとは言いませんからね。友人に相談したら、だいたい友人というのは、まあ、待てよっちゅうんですよ。まあ、待てよ。死ぬ気になったら、なんでもできるやないかというのは友人の言葉なんだ。**

**で、これが問題を外から客観的に見た人間の言葉なの。で、悩みのドツボにはまってしまったら、死ぬっきゃないということになるわけですよ。で、ここにその理性の間違った使い方と正しい使い方の違いがあるわけですね。同じように考えるんですけど、悩みのドツボにはまって、悩みを持ちながら考えたら、答えは出るんだけど、全部それは間違った答えであって、しかも、その問題から抜け出せないような、その問題にこのとらわれて、結局はその問題に負けてしまうような答えしか出てこない。悲観的なマイナスの答えしか出てこない。あと、その問題を乗り越えていこうという、その問題を乗り越えていく力をつくっていくためには、その問題を外から客観的に見るという立場に立たせてあげないと、理性はその問題を解決する答えは出せないということなんですね。**

**で、具体的にはどういうことなのかといったらね、どんな問題でも、どんな問題でもね、会社の問題でも、夫婦の問題でも、子どもの問題でもね、人間関係の問題でも、どんな問題でも必ずどうセントバーナードかね、どうセントバーナードかと申しますとですね、どんな問題でもね、自分が問題を持ったならばね、必ずこの問題が他人の問題だったとしたら、そして、他人からこの問題で俺が相談されたら、俺はその他人にどうアドバイスしてやるだろうかなというふうに考えたらね、必ず正しい答えが出るんですよ。だけど、ここで難しいのは、本当に俺の悩みを他人の悩みに置き換えることができるかどうかなんですよね。本当に他人の問題に置き換えてしまったら、どんな問題でも、全部、自分の力で人生を乗り越えていけるんですよ。だけども、ほとんどの人は、他人の問題にしないで、俺の問題として考えるから、問題につぶされて駄目になるんですよ。夫婦げんかは犬をも食わん。夫婦はちょっとした問題でがちがちになってけんかしてる。だから、他人から見たらね、なんでそんなことでとこう言うわけですよ。それは他人の目なんだ。だけど、そのなんでそんなことと言ってるその人も、また夫婦の問題になってくると、ちっちゃな問題でがちがちになって、外から自分を見ることをできなくなって大げんかするわけですよ。**

**だけど、どんな問題でも、他人から見たらね、なんでそんなことで、そんな大げんかするのとこう言いたくなるわけですよ。それが他人事の世界なの。だから、国会なんか与党、野党、けんかしてるでしょう。で、その醜い言い争いをしてるでしょう。国民が見たら、またあんなことやってると言うんですよね。だが、その人の会社に行ったら、また同じようなことで醜いけんかしてるんですよね。他人から見たらね、問題を外からこう見てるもんで、自分事じゃないもんですからね。だから、その問題の核心というかね、その問題の本当の、まあ、姿が見えるんですけど、問題の中に入ってしまうと、その問題の全体が見えないのでね、ちっちゃな問題にとらわれてですね、いかにもそれを大ごとのようにみんなけんかするんですよ。**

**これは私もですね、高校時代に数学の問題を解いておってですね、なかなか自分で解いておると解けないんですよね。ところが、同じ問題をですね、友人が、ここのところ、どうしたらいいんやっちゅうて、こう相談に来たんですよ。で、自分で説いておったら解けなかったからね、だけど、相談されたから、俺もわからんとこう言いにくくてですね、うん、そうやなっちゅうて、こう一緒に考えてね、やっておったんですよ。ところが、他人から相談された問題に答えようと思うとね、ふっと答えが出てきて、すっと解けてしまったんですよね。そういう体験がね、何度かあるんですよ。自分でこの悩みながら考えてると、なかなか答えが出ないんだけど、他人に相談されて、教えてやろうと思ったらね、答えが出ちゃったというね、そういうこの体験があります。で、これもやっぱりね、悩みの中に入ってしまうと見えないんですけどね、外から見るとね、その問題の本質が見えてくるというね、まあ、そういうことなんですね。これが理性の使い方というもののですね、非常に大事なですね、この原理です。**

**週刊誌に書いてある芸能人の問題なんかでも、芸能人本人は本当にもう身もやつれるほどね、身も細るほど悩んでるんですけど、それでも奥様方は、ちょっとこう、ちょっと週刊誌の記事を読み返しただけで、こんなこと、こうすりゃいいのにねと、一発でもう正しい答え、ぼんと言ってしまってるわけですよね。もうそれぐらい、この他人の問題点というか、他人の欠点というのはよく見えるんですよね。だから、相当ね、立派な素晴らしい会社の社長さんでもね、なかなか自分の会社の問題とか、自分のこの営業、自分の経営力の問題というのは、なかなかね、まあ、気が付かないというかね、解決できないんですよね。だけども、そのどうしようもなくなって、経営コンサルタントの先生を呼んでくるんですよね。すると、その経営コンサルタントの先生というのは、そうべつに立派な大した経営コンサルタントでなくってもね、だいたいやってきて、帳簿を見てね、話を聞いてるうちに、ここのところはこうするべきですねと、一発でぱっとこう答えを言ってしまうんですよね。で、実際そうしたら助かるんですよ。本当、他人の欠点はよく見える。他人の目で見るとほとんどの問題は解決するんですよ。これはものすごくね、人生を生きるために大事なですね、この課題なんだ。**

**みんな子どもの問題でもね、子どもの問題でお父さん、お母さんが悩みながら、子どもの問題でどうしようかと考えると、そうすると、この子にこんなことをさせたらかわいそうやしな。こんなことをしたら、またこんな問題が出てくるしな。全然ね、回答が出ないで、かえって子どもを甘やかし、また子どもを駄目にするんですよね。だけど、他人の子どもだったら、他人の子どもでそういうことで相談されたら、俺はその人にどう言ってやるだろうかと、相当厳しいことを言うんだけど、だけど、現実はそうせんと助からんのですよね。自分の子どもと思うとなかなかできないんだけど、他人の子どものことでね、そのお父さん、お母さんから相談されたら、俺はどう言ってやるだろうかと思ったら、厳しいけど、正しい答えが出るんですよ。で、実際にそうせんことには、絶対その問題は助からないんですよ。まあ、とにかくそういうね、大きな問題にぶつかったとき、まあ、何か悩みにぶつかったときは、ぜひ夫婦げんかは犬も食わんっちゅうことをね、思い出してもらいたい。**

**それから、深い森の中に迷い込んだときには、その森の中に生えてる一番高い木のてっぺんに登って、一番高い木のてっぺんから森全体を外から眺めたら一発で答えが出るんだというね、そのことをぜひ思い出してもらいたい。で、具体的には、とにかくどんな問題、悩みでも、全部他人事にしてしまうということができたら、全部自分で解決できるんですよ。それができない方々がですね、問題を抱えると、細木数子さんのところへ行ってしまうんですよ。で、こうしなさい。「はいっ」ちゅうて帰ってきてですね、そうしたら、うまくいってしまうんだけど、だけど、それは他人に教えられてやってるから、自分の力じゃないんですね。だから、その人はもうことある度にですね、占い師とかなんとかに皆、頼ったりなんかしてね、で、その人の言うとおりやってみる。そういうこの他人の意見に振り回されてですね、生きる。自分が自分の人生を生きる力をつくれないというね、そういうことになってしまうんです。**

**だけど、自分の人生を自分が生き抜いていく力をつくろうと思ったらどうするんだといったら、とにかくどんな問題でも他人事にする。で、このどんな問題でも、本当に他人事にできるまでは、ちょっと修行というかね、ちょっとはね、努力してね、その本当にそうできるということになるためには、ちょっとは時間がかかるんですけど、そうできたらね、本当に楽ですよ、人生は。どんな問題でも全部解決できる。自分でなんとかなるんですよ。だけど、やっぱり人間は不完全ですからね、一発でうまくいってしまうっちゅうことはめったにないんですよ。だけど、とにかくは他人から相談されたら、俺はその人にどう言ってやるだろうかなと思ったらね、他人やったら、他人やったら、こういうふうに言ってやるだろうなと思うことを自分でやってみるんですよ。そうするとですね、自分で行動を起こしたら、必ずその自分が行動を起こしたことに対して状況は反応しますからね、だから、状況は変わってくる。だから、その状況が動くことによって、ああ、こう出たら、こうくるんやなというね、そういうことで、今、自分の置かれてる状況がはっきりこう見えてくるわけですね。で、またその状況で相談されたら、俺は他人だったらどう言ってやるだろうかなと思ったら、他人ならこう言ってやるだろうなと思うことをまたやってみる。また行動すれば、また状況が動く。こうしたらこうなるんやな。それがだんだんわかってきてですね、こういったら、相手はこう出てくる。じゃあ、こういうふうにいったら、またこう出てくる。だんだんと相手の出方なりですね、その状況がちゃんとわかってきて、で、最終的になんとか繰り返し失敗しながらですね、なんとかやり直してるあいだに、最後にこううまくいったというね、まあ、そういう体験をつかんだとき、この人間には実力というものができるんですよ。**

**一発でうまくいってしまうと不安ができてきて、実力にならんのですね。一発でうまくいってしまうと、今度はうまくいくかなと不安が出てくるんですけども、人間の実力というのは、失敗を繰り返しながら、最後に成功体験をつかんだとき、実力になるんですよ。どういう実力なのかといったら、俺なら、俺が出ていったら、どういう状況でもなんとかなるな。なんとかできるな。そういう自信なんですよ。これが不完全な人間における人間的自信というもののあり方なんですね。失敗しないと、絶対に実力はできないんですよ。一発でうまくいってしまう人間は不安が出てくるんですよ。何度か失敗しながらしか、実力はできないんですよ。だけど、大事なことは、成功するまでやめないことなんですよ。失敗に終わってしまったんじゃ、これはもう、いわゆる劣等感というか、挫折感というか、その失敗を途中でやめてしまったら、これはもう本当、自信喪失になってしまうんですよね。**

**どんなことでも、とにかくは、成功するまでやめないっちゅうことがね、自信をつくるための非常に大事な方法論だ。そのためには、失敗したときにね、今度はどうしたらいいだろうか、今度はどうしたらいいだろうかで、とにかくは創意工夫を加えながらですね、常にやり方を変えていってですね、そして、今度はどうしようか、今度はどうしようかで、そのやっていったら、必ずですね、諦めなければ、必ず答えはある。答えは必ずありますので、必ずその答えに到達できるんですよ。失敗した人は途中でやめちゃう。成功する人は成功するまで頑張っちゃった人なんですよね。それだけの話なの。とにかくどんだけ失敗しても、成功するまでやめないということがね、この大事で、どんな問題でも答えはあるんだ。答えのない問題はないんだ。失敗をすることが大事なんだ。だから、失敗し続けていいっちゅうんじゃなくって、失敗しながら、創意工夫を付け加えながら、だんだんといい方法を考えていってですね、そして、最終的にこの答えはあるんだから、その答えに到達するまでやめない。これがですね、力を、実力をつくっていって、成功する人間、成長していく人間のやり方なんですよ。**

**エジソンさんがですね、なんであんなにこの発明王と言われるような、まあ、たくさんの発明、発見ができたのか。あれは、失敗というものは、成功への確率を増やすんだという、そういう解釈をしておったからなんですね。失敗というのは、一歩一歩、成功へ近づいてるんだ。普通の人は失敗すると、だんだん自信がなくなるんですよ。だけど、エジソンさんは、失敗というものはこうしたら失敗する、こうしたら失敗するっちゅうことは、一つ一つ、わかってくるんだから、それは一歩一歩、成功へと近づいておって、失敗の数だけ、この成功への確率が高まっていくんだというね、まあ、そういう自信を持っておった。だから、案外と早く成功できた。だけど、失敗することによって、だんだん自信がなくなっていくと、だんだん、だんだん、成功から遠のくんですよ。これもやっぱり、心理学的にものすごく大事な原理でね。もう駄目かなと思ったらね、もう本当にもう底力は湧いてきませんしね、必ず成功するんや、必ず答えがあるんやと思ったら、案外と早く答えが出るんですよ。これが信念というものの大事さということなんですよね。信念を持ってですね、成功するまでやめないという信念があると、案外早く成功するんですよ。成功するかもしらんけど、失敗するかもしらん。不安がある分だけ、なかなか答えが出ないんですね。だから、もう人生っちゅうのは、とにかくはどんな問題でも必ず答えがある。答えのない問題はないんだ。何回も何回もこの創意工夫を付け加えていったら、必ず成功できるんだ。成功できないことはないんだ。まあ、そういうこの信念を持っておったら、早く成功します。早くうまくいくし、早く答えが出る。**

**これはもう理性の使い方ということで、絶対に忘れたらいかんですね、大きなこの原理なんですよ。理性は客観性と普遍性の能力である。どんな問題、悩みでも、他人事にしてしまって、その問題、悩みを外から全体を見るという立場に理性を立たせてあげないと、理性は正しい答えが出せないんだ。悩みながらでも考えられますけど、悩みながら考えると悲観的な答えしか出ません。また答えを出しちゃったとしても、その答えはゆがんでます。曲がってます。的を外れてます。悩みながら考えた答えというのは、深い森の中に迷い込んだ状態で、どちらに行ったらいいだろうかと考えてるのと同じ状況なんですよ。あちらに行ってみようかと答えを出しても、そこには確信がないからね、不安ばっかりなんですよ。とにかく理性で答えを出すためには、どんな問題でも他人事にしてしまう。これがもう唯一のですね、方法論ですよ。それが理性の正しい使い方なんですよ。だから、皆さん方も、ニュースとかいろんなものを見ながらですね、あんなことはこうするべきだよなって、平素、みんな何気なく言ってるんですよ。その皆さん方のその言ってることのほうが正しいんですよ。で、そのニュースに出てくる人がやってるやつは間違いなんですよね。だから、まあ、こうしたらいいのにねと言ってしまうんですけどね。まずはね、この答えを出すのは理性だから、理性の使い方というものをちゃんと覚えないと、人生は生き抜いていけないということをね、まず知ってもらいたいと思います。**

**で、そういう問題を解いていく場合でもね、やっぱりね、ちょっとでもね、逃げたいとかね、苦しいとかね、あるいは依頼心とか、依存心。誰かなんとか助けてくれんかなと思ったらね、もう答えは出てこないんですよ。苦しいという気持ちが出てきたらね、もう自分のこの底力は湧いてきません。もちろん、苦しいんですよ。苦しいんだけど、大事なことは、このままでくたばってなるものか。このままでは終わらんぞというね、そういう気持ちのほうが苦しいという気持ちよりも勝ってきたとき、潜在する能力が出てくるんですね。で、逃げたいと思うとね、もうそれだけで今、自分の置かれてる問題状況が浅くしか見えないのね。逃げたいと思うと。しかも、逃げたいという気持ちはこう、はす交いにもう逃げに入ってるもんですからね、今の自分の置かれてる状況がゆがんで見えてしまうんですね。で、誰か助けてくれへんかなと思ったら、もうその分だけ、自分の力は、自分の底力は、自分の潜在能力は出てこない。まずそういう問題を解いておる最中にでもですね、この逃げたらいかんという、そういう気持ちは常に持ち続けてないとね、途中でやめてしまうことになります。そして、この失敗することに不安と絶望感が募ってくるというね、そういう状況で、もうそれは絶対、問題を乗り越えられないですよね。**

**必ず答えはある。必ず乗り越えられるんだ。成功するまでやめんぞ。そういう気持ちがあったら、必ず問題は早く出てくるっちゅうか、答えは早く出てくるんですよ。その信念がね。それが信念というものの重要性なんですよ。自分がぐらついておったら、なかなか答えは出ないんです。問題には必ず答えがあるんだ。逃げなければ、底力は湧いてくるんだ。そして、この成功するまで絶対にやめないぞ。この３つがですね、自分の気持ちの中にあったら、必ず問題は乗り越えられますし、自分は必ず成長できます。問題を恐れたらいけません、とにかくは。問題が出てきたということは、そこまで成長してきたんだ。そこまで自分は成長してきたんだ。自分がその問題を呼び起こしてるんですからね。問題がなかった状態から問題がある状態になったのは、成長してるからですよ。で、その問題を乗り越えることによって、また自分の底力が湧いてくる。だから、問題が出てきたということは、新しい成長の段階に自分が入ってる。その問題から逃げなかったら、俺は飛躍的にね、その高い段階に成長できるんだ。そのチャンスを天は自分に与えてくれてるんだ。それが問題が出てきたということの価値だ、意味だ。そのことをですね、ちゃんとわかっておいてもらいたいと。**

**問題がなかったら、何事も成長しないんだからね。社会に犯罪と事故がなかったら、社会は停滞するんですよ。犯罪も事故も社会を発展させるために出てくるんですよ。犯罪すらこの社会を発展させるために出てきてくれてる現象なんですよ。事故すら社会を発展させるために起こしてくれてる現象なんだ。何が問題なのか。どこにこの現代社会の欠陥があるのか。そのことをですね、教えてくれるために犯罪も事故も起こるんですね。それに対応していくことによって、歴史はつくられるんですよ。犯罪が起こる、事故が起こるということは、新しい技術を開発しなきゃならんというときが来たんだ。そこまで成長してきたんだ。飛躍のときがきたんだということを事故も犯罪も教えてくれてるんですよ。今、離婚の激増とかですね、幼児の虐待とか、高齢者の虐待とか、違いを理由に、民族の違いや宗教の違いで戦争や殺し合ってる。これは人類が新しい能力を持って成長するときがきたんだ。これからは、われわれは愛の実力を磨いていって、愛を文化として、愛を能力として成長させていって、そして、新しい、より素晴らしい時代をつくっていく。そういうことができるためには、離婚の激増や幼児の虐待という問題が出てこないと、愛の力を能力として成長させようという、そういう自覚、思いが生まれてきませんからね。人類をもう一歩、この高い次元に成長させるためにね、そういうこの離婚の激増も起こってくるし、幼児の虐待も起こってくる。なんとかせんないかんなと皆、思いますからね、そのことによって。だから、成長するんですよ。**

**だから、会社の発展が止まった。そして、営業成績も落ち、いろんな問題が出てきたという状況があったなら、チャンスだと。そのときこそ、このいろんな考え方、いろんな人を知恵を集めて、いろいろ議論してですね、そして、その会社の新しい発展段階をつくっていこうという情熱に燃えてですね、この頑張る、立ち上がるということをしなきゃならんので、具合が悪くなってきたというんで、なんか悲観的になっておったんじゃ、これはもう話にならん。問題に負けてるんですからね、それは。問題とはなんなのかっちゅうことを知らんからね、そういう対応を取ってしまうんです。問題が出てきたということは、新しい飛躍のチャンスがその会社に与えられたっちゅうことなんです。今までのやり方とは違うやり方を編み出さんないかん。考え出さんないかん。そういうこの創造力に燃えてですね、頑張るチャンスを与えてもらったんだと。成長するチャンスを自分が与えてもらったんだ。まあ、そういうふうなですね、理解の仕方をまずはですね、していかないといけないわけですね。**

**だけど、そのときにどういう考え方をするかといったら、理性は客観性と普遍性の能力だ。もし、自分とは違う、他人からこの問題で相談されたら、俺はその人にどういうふうに言ってやるだろうか。そういうふうに考えたら、必ずですね、なんからの答えは出るんですよ。答えといってもですね、非常にそのレベルの低い答えからね、高度な答えまで、いろいろな段階がありますよね。だけども、答えは出ないことはないんですよ。とにかく一応、なんらかの答えは必ず出るんですよ。だけども、大事なことは、一発で、答えを持っても一発でうまくいくとは限らない。多くの場合、一発でうまくはいかないのでね、答えが出て、その答えでいろいろやってみてもなんともならなかったで、また諦めたらいかんと。答えが出るまでやめない。うまくいくまでやめない。それが不完全な人間の問題を乗り越えていく力をつくっていくですね、大事なこの心構えですね。不完全なんだから、一回では、どんなことでも一回ではうまくいかんのだということをね、知っとらんないかん。何回失敗しても、とにかくやめない。これは成功するまで俺はやめんぞというね、そういう気持ちがまずなかったらいかん。**

**今は時代の大転換期で動きが激しいですからね、ある一定のやり方でうまくいっておってもね、あっという間にそのやり方は通用しなくなるんですよ。常に新しいやり方、常に新しいやり方、常に同業他社とは違うやり方っちゅうのをどんどん、どんどんね、みんなが頭を絞って、知恵を絞って考えていかないと、会社の発展は止まりますよ。本気になって考えたら、必ずね、その知恵は出てくる、気付きは出てくる、潜在能力は湧いてくる。本気にならんと湧いてこない。まあ、なんとかなるやと、そういうことではもう絶対、なんともならんね。なんとかしようと思ったら、なんとかなるんですけどね。まあ、なんとかなるやろうって、そういうあなた任せのですね、真剣さのない考えでは、なかなか答えは出てきませんね。まあ、とにかく問題を乗り越えるということをしないと、深さはできませんのでですね。まずはその問題を乗り越えるために、まず第１原理はなんなのかといったら、理性の使い方である。答えを出すのは理性だから、理性の使い方を間違ったら答えは出ない。理性は客観性と普遍性の能力だ。そのことをまずね、ちゃんと押さえてもらいたいと思います。だけど、答えといってもですね、ピンキリなんですよね。低い段階の答えとね、高度な段階の答えがあります。で、その答えのレベルを上げていこうと思ったら、どういうことをするかといったらですね、物事の本質を見抜く眼力をつくるということをセントバーナードなんですね。物事の本質を見抜く眼力をつくる。物事の本質を捉えないと、核心を突く問題解決能力というのはできないんですよね。で、この問題の本質を見抜く眼力と申しましたけど、眼力というのは、これは感性の力なんですよね。だけど、理性的な人間はですね、学問的にいろいろとその問題解決の方法論を学ぶんですよね。で、問題解決学とかいってですね、その方法論を学んでしまう。方法論を学んでしまうとね、その方法でしか見えない本質しか見えないんですよ。方法にとらわれてしまうと、その方法で捉えられる本質しか出てこないんですね。これでは本当の生きた現実を見失うんですよ。**

**だから、学者というのは、みんな方法論にとらわれるものですからね、学者は本当にね、現実を知らんのですよ。だから、経済学者は絶対株ではもうからんのです。経済学者の言うことと反対の方向に必ず現実は動くんですから。経済学者がですね、今年の末は株が高いと言ったらですね、その今年の末にはもう下がってるんですよ。今年の末に高いんやったら、今、買うとかないかんというんで、６月ぐらいから買い始めるんですよね。だから、もう12月になったら下がっちゃってるんですよ。高いときに売らんないかんからね、安いとき買わないかんからね。経済学者の言うことと全然違う方向性に生きた経済は動くようになってるんですよ。まあ、とにかくは、学者というのは、方法論でいろいろ法則とか、そういう方法論でですね、現実を捉えようとするもんですからね、だから、その方法で捉えられるような現実しか見えてこないので、本当の現実の生きた実態はつかめないんですね。だから、学者はほとんど現実を知らない。象牙の塔に閉じこもって、数字とかね、統計とかからしか現実は見えませんからね。だから、本当の現実の中で生きてる生身の人間のつらさ、苦しさがわからないのね。**

**じゃあ、どうしたら本当の生きた現実のですね、この本質をつかむことができるのかといったらですね、その方法論にとらわれたらいかんと。すなわち、自分が今、プロとしてやってる仕事から出てくる問題を教材にしながらですね、その問題の本質はどこかということを勘とコツで、勘とコツで探り求めていくということをしないと、生きた現実はつかめないんですね。勘とコツを使わないと。で、実際、どういうことなのかといったら、まあ、自動車の修理工場のね、その技術者はどういうことをするかといったら、その車が故障したって持ってきますよね。すると、ここが故障したんですと言うとですね、すると、技術者というのはどういうふうに考えるかというと、ここが故障したんやったら、原因はこれか、これか、これやと。だけども、こういう故障の仕方というのは、多分これやなというね、そういうこの勘で、その問題点の核心をぽっとこうつかむわけですよね。それはプロにしかできないですね、その問題の核心のつかみ方なんですよ。**

**これはどんな職業でもね、そういうふうなものがあります。そういうふうにして、自分が今、やってる仕事から出てくる問題の、常にその本質はどこなのかということをですね、つかもうとするような、まあ、そういう努力をしておるとですね、問題を解決する能力が成長します。核心を外したら、なかなか問題解決しませんけどね、問題の核心、本質をつかんだら、問題を解決するスピードは早くなります。しかも、その解決するときの答えが、より高度な答えが出てきますからね。だから、その問題というものが、よりこの効果のあるですね、まあ、そういうこの、まあ、展開の仕方をするというかね、まあ、そういういい答えが出てきます。そういう意味で、問題の核心をつかむために、物事の本質を見抜く眼力をつくる、養うですね、まあ、そういう努力もですね、やっぱりこれは非常に大事な、プロとしてのですね、能力のつくり方なんですね。で、そういうものが、自分の仕事を通して、そういう勘とコツで問題の本質をつかもうという眼力ができればね、どんな問題でもね、その眼力で対応できるんですよ。画家は画家なりに絵を描くということを通してですね、そのいろんな問題を乗り越えていくもんですから、そういう絵を描くという作業を通しながらつかんだ、そのいろんな問題の本質をつかむという眼力で、いろんなことをまた判断するね。**

**まあ、とにかくは、理性のこの固定的なかたちにとらわれてしまうと、生きた現実は見えてきません。勘とコツというね、まあ、そういうこうかな、ああかな、どうかなとこう、その揺れ動くというのは、これは生きてるっちゅうことですからね、自分の揺れ動く感性でですね、こうかな、ああかな、これとちゃうかな、あれとちゃうかなって、こう模索しながらですね、現実に対応して、そして、ここやというものをつかむというね、まあ、そういう眼力ができてくると、的確にですね、いろんな事柄で物事の本質をつかむという力が育ってきます。ぜひそういう勘とコツを働かせながらですね、いろんな問題の核心をつかむ。その人の心の本質をつかむっちゅうこともそうですしね、こうかな、ああかなという、いろいろ考えて、そして、このこれやというものをつかむって、そういうふうな心の使い方をね、ぜひ仕事のうえでも、人間関係のうえでも覚えてもらいたいと思います。固定的なものを持ったら、現実は本当の相手は見えなくなってしまう。対象の本質は見えなくなってしまう。常に自分の心をフレキシブルにね、その揺れ動かしながら、模索的に対応するっちゅうことは非常に大事なことなんですよね。で、その物事の本質を見抜く眼力というのは、本質というのは現象の根底にあるもんですからね。そういう物事の本質を見る眼力ができてくると、まあ、心の中に深さというね、そういう構造がひとりでにできてくるんですね。まあ、だから、物事の本質をつかむ眼力を持てば、深いことが言えるというね、ことになってきます。**

**それから、物事の意味や価値や値打ちや素晴らしさについて考えるというね、そういう習慣をつくらないと、深さというのは出てこない。いろんな事柄に関して、どういう意味があるのか、どういう価値があるのか、どういう素晴らしさがあるのか。まあ、そういうことを考えていくと、だんだん、だんだん、物事が、だんだん物事のですね、まあ、表面的な事実だけじゃなくってですね、その事実がどういうふうな、その意味を持ってるかということもですね、こういう意味があるんじゃないか、こういう価値があるんじゃないか。いろいろ考えていくと、だんだん、だんだん、そのことによってですね、ものを見る目、人を見る目の深さがこうできてきてですね、そして、まあ、そのことによって、今まで見えなかったものが見えてくる。今までわからなかったものがわかってくるというね、まあ、そういう成長が心、精神に、まあ、できてきます。これもやっぱり、その固定的に物事を考えるんじゃなくって、こういう意味があるんじゃないか、ああいう意味があるんじゃないか。これは解釈力でね、こういうふうに解釈してみたらどうや、ああいうふうに解釈してみたらどうや。いろいろ理解の仕方というものをね、あれこれとこう自分が模索していくと、そうすると、だんだん、だんだんですね、その物事への理解が深まっていって、今まで見えなかったものが見えてきて、今まで気が付かなかったことに気が付いてというね、そういう状態で心は成長していって、そして、このものを見る目、人を見る目の深さができるという、まあ、そういう状況になります。**

**まあ、その意味でもですね、この人間の心は意味と価値を感じる感性ですので、いろんな意味や価値についてですね、これにはこういう意味があるんじゃないか、こういう価値があるんじゃないか、こういう素晴らしさがあるんじゃないか。それをいろいろ考えていくと、だんだん、だんだんね、いろんなことに気付きが生まれてきましてですね、で、気付きが湧いてくれば、それだけものを見る目の深さができてくるわけですね。湧いてくるから、命から湧いてくるからね。そこにこの深いという構造がこう自然にできていってしまうんですね。まあ、その一端としてね、問題というのは自分を成長させるために出てきてくれるんだって解釈もね、これもやっぱり、物事に対する深い理解で、そういうふうな解釈の仕方、そういう意味というものを理解できない人はですね、やっぱり人生の生き方は浅いですよ。病気すら自分に何かを教えるために出てきてくれてるんだ。**

**まあ、これは昔からいわれてることですけど、万象是皆師なり。万象というのは、あらゆる千万の万という字ですよね。万という字と、象というのは現象ね、現象の象という字を書いて万象ね。万象是皆師なり。あらゆる現象は、何かを自分に教えてくれるために出てきてくれてるんだ。無意味な現象は何もないんだ。全部は何かを自分に悟らせよう、教えよう、何かをわからせよう。何か意味があって、全部出てきてるので、無意味な現象はない。だから、あらゆる事柄を通して、いったい何故に自分にこういう問題が降り掛かってきたんだろう。どうしてこういうこの問題が出てきちゃったんだろう。なんで俺はこの人と会ったんだろう。なんで俺はこの時代に生まれてきたんだろう。いろんなことを考えるんですよね。そうすると、それが全部、自分にいろんな気付きをもたらしてくれて、自分を成長させてくれる。それが全部、その人の深さというものをね、この人間性の中につくってくれる方法論になるわけですね。**

**そういうふうな努力をしていくとですね、いったい人間は最終的にどこまで深くなれるのかですね。いったい人間の深さというものは、最終的に行き着くところはどこなのかというとですね、それは宇宙とつながったという、そういう命を自分が持ったとき、もうそれ以上、深くはならんというところまでいくわけなんですよ。ということは、まあ、だいたい人間の悟りの究極はね、俺は宇宙や、俺は永遠の生命や。そういうことを悟ったとき、この、まあ、仏教なんかでも、究極の悟りを得たとこう言うわけですよね。座禅、瞑想、そういうものが最終的に目指すものは全部ですね、そういう宇宙と自分の命がつながったという、そういう状態を自覚することが、最終的な悟りとこういわれております。そして、その宇宙と命がつながることによって、宇宙から湧き上がるようなですね、まあ、そういう大きな力で、自分が仕事をし、生き、また宇宙からいろんなことを教えてもらって、いろんなことができていくというね、そういうことで知恵が湧いてくる、気付きが湧いてくる、潜在能力が湧いてくるという、そういう湧いてくる力で生きるというね、そういう状態に人間はなれるわけですね。また、そのとき、まあ、一番人間としては深いことが言えるというね、そういう状態になります。**

**じゃあ、どうしたらいったい自分の命は宇宙とつながることができるのかっちゅうことなんですけど、だけど、これはその命は本来、もう宇宙と最初からつながっちゃってるんですよね。ということは、人間は寝ておっても死なない。寝ておっても死なないということは、自分の命が生きてるのが、自分で俺が命を生かしてるんじゃなくって、宇宙の摂理の力によって命は生かされてますのでね、もともとこの命というものは宇宙とつながっちゃってるんです。だけども、こざかしい、理性を使って人間がいろいろと判断したり、やってるもんですから、宇宙とのつながりが意識においては切れてしまっておってですね、そして、この宇宙の摂理に逆らうような、反するような生き方を人間がしてしまってると、この宇宙の摂理の力が、それをこの、まあ、批判するというか、それじゃいかんやないかっちゅうことでですね、病気にさせてもらったりね、失敗をさせてもらったりね、またいろいろ問題を与えてくれて、その宇宙の摂理に反してるようなことをしてるっちゅうことに気付かさせてくれるふうな、まあ、そういうこの問題、悩みを自分に与えてくれるんですね。本来、もう命はね、元からもう宇宙とつながってるんですよ。**

**じゃあ、どうすれば、人間の意識がですね、その宇宙とつながれるという状態で、宇宙から湧き上がるエネルギーで、その人生を生きるということができるのか。実際そういうことになった人というのは、どう言うかっちゅうとですね、まあ、小説家なんかでも、俺が書いとるんやないと。書かされとるんやっちゅってですね、書いてるわけですね。本当はもう疲れてやめたいんだけど、やめさせてくれへんのやっちゅって、書いておったりするわけですよ。画家やなんかでも、描かされてるっちゅうて描いたりね。まあ、よく自動書記というか、なんか天からなんかぱっとこう言われて、自分では考えないで、まあ、手が勝手に動いて描いちゃってるというような、そういう感じの人もね、いらっしゃったりなんかしてですね。まあ、とにかく、この経営者でもそうですけど、いろいろ仕事をするね、その人なんかでも、宇宙とつながってしまうと、このエネルギーがこう命から湧いてくるもんですから、普通の人なら疲れて倒れるところを、疲れを知らないで頑張れることができるとかね。そういうこの状態にこうなってしまうわけですよね。まあ、そのことによって、普通の人ができないことができてしまうというようなことにもなってきますし、また、この理性で出てくる答えではない。宇宙から何かこう教えられたような答えが湧いてくるというね、まあ、そういう知恵が湧いてくるという、そういう状態にこう人間がなっていく。自分の力でないものが命から湧いてくる。まあ、そういうものがこう、自分自身でも感じられるような、そういう状態に自分がなれるわけですね。**

**じゃあ、どうしたらいったい、そういうこの宇宙から湧いてくるということをいろいろ実感しながらですね、人間は自分の個人としての限界を超えたですね、大きなそういうこの力で人生を生きていくことができるようになるのか。そのためにはですね、この今、自分の持ってる理性ではなんともならんというね、理性の限界にまず自分がぶち当たって、どう考えてもなんともならん。そういうふうなですね、この状態にまずぶち当たる。それがこの理性の限界に到達するということになるわけですけど、理性の限界に到達しないと、理性以上の、理性よりも優れた力は湧いてこないんですよね。まず理性の限界に到達せんないかんと。で、ほとんどの人は理性の限界に到達すると、もう万策が尽きた。もう俺は駄目やっちゅってやめてしまう、諦めてしまうっちゅうことになってしまうんだけど、そこからもうちょっと頑張って、だけどなんとかしたい。だけど、なんとかせんことにはやっていけないと。まあ、そういうふうなですね、気持ちで頑張ってる。そして、このいろいろ苦しんでですね、のたうち回って、もうどんどん、いろいろ問題が湧いてくるもんですから、もうこれは本当に俺の人生の地獄やな。まあ、そういうふうな状態にね、まで陥って、だけど、このままでくたばってなるものかとやってるとどうなるかというとですね、その命には常に宇宙の摂理の力が働いておって、命を生かすという、そういうこの力がいつも命に働いてるんですよね。で、命を生かす力というのは、母なる宇宙の愛なんですね。**

**ところが、その命が苦しんで、どうしようもない。のたうち回って苦しんでるとね、そうすると、命を生かす力は愛ですからね、なんとかしてあげたいという、そういう状況になるんですよ。いわゆる、まあ、のたうち回って苦しんでると、お母さんの母性愛をくすぐるんですね。で、母なる宇宙がなんとかしてあげたいというね、そういうことになってきて、で、もう俺は駄目かもしらん。だけど、このままでくたばってなるものかと思ってるとですね、そうすると、この命がだんだんと、まあ、自信をなくして衰えていくという状態になっておるのに、だけど、その人はなんとかしたいと思って頑張ってるという状態になってくると、そうすると、この命の中で働いてる母なる宇宙の愛の力がなんとかしてあげたい。その命を生かしてあげたいというね、そういう力がですね、その命でどんどん目覚めてきて、それがこの大きくなってくる。そうすると、どうなるかっちゅうと、自分が苦しむことによって、母なる宇宙の愛を目覚めさせて、そして、生きる力がですね、その自分が苦しむことによって生きる力が高まってくる。まあ、これは病気になると、この自然治癒力が働いて、病気を治してくれるというのと同じ現象なんですよ。苦しくなると、命を生かす力が高まってきて、目覚めてきて、そして、なんとかしてあげたいということになってですね、生まれながらにその人に与えられておる潜在能力というものが、この触発されて、目覚めてきて、で、潜在能力が湧いてくる。結果として、ああ、そうかという気付きがね、その母なる宇宙の愛の力によって引き出されて、その問題を乗り越えさせてもらえるんですよ。**

**さらにこれはどういう構造なのかといったらね、問題というものは、生まれながらに持って生まれてきた潜在能力を引き出すために全部出てきてるんですよ。問題というものは、もうすでに答えとリンクしてるんですよ。問題というものは、その命に与えられておる潜在能力を引き出すためにしか出てこないんですよ。ないものは出てきませんからね。で、問題というのは自分がつくり出すんですよ。人間は自分がいろいろ生きることによって、自分がつくり出すんですよ。人間的な問題しか出てこない。人間的な問題というのは、生まれながらにその人間に与えられてる潜在能力に全部リンク、対応してるんですよ。だから、問題というのは、潜在能力を引き出すために出てくる。じゃあ、その潜在能力は誰から与えてもらったんやいうたら、お母さんから与えてもらった。母なる宇宙から遺伝子は与えられたんですよ。自分でつくったもんじゃないですからね。母なる宇宙から遺伝子は与えられてる。その遺伝子というのは、その人間が人生を生きるためにその人に与えられたものが遺伝子なんだ。だけど、その潜在能力というのは、出てこないと働かないからね。どうしたら、その潜在能力は出てくるのかといったら、問題がないと出てこないんですよ。しかも、理性の力でなんともならんという問題が出てこないと、潜在能力は出てこないんですよ。理性でいろいろやってるあいだは、潜在能力は出てこない。出てこれない。人間のこざかしい力でいろいろやってるあいだは、潜在する能力、知恵は湧いてこない。潜在能力は出てこない。**

**理性の力でなんともならん。万策が尽きた。だけど、このままではなんともやっていけへん。なんとかせんないかんと思って頑張ってると、そうすると、このお母さんが助けてあげようと思ってくれてね、で、このお母さんが生まれながらにその人に与えておいた潜在能力をですね、このお母さんの愛の力によって呼び覚ましてくれてね、で、その問題、つらさ、苦しさを乗り越えるために必要な、その潜在能力が出てきて、その問題を乗り越えさせてくれるんですよ。そういうふうにして答えは出てくるわけですよ。そういう構造に命はなってるんですよ。だから、もう問題が出てきたときから答えはある。答えは潜在してるんですね。その潜在能力を引き出すためにしか問題は出てこないんですよ。出てくる問題は、全部、人間的な問題ですからね、自分が自分としていろいろやってつくった問題ですからね。借金でもなんでも。自分がつくっちゃった問題ですから。どうしたらその問題を乗り越えられるのかっちゅうことは、もうちゃんと命の中にその答えがあるんですよ。だけども、もう駄目やと思ったら出てこない。もう駄目や。そやけど、このままでは終われん。このままでくたばってなるものか。すると、お母さん、助けてあげたいと思っちゃってくれるわけですよね。で、お母さんがその人に生まれながらに与えておいた潜在能力を顕現させてくれる。すると、その問題がその潜在能力を引き出すもんですから、ああ、できちゃったということになるわけですね。**

**知恵も気付きもね、潜在能力も、自分で引っ張り出すんじゃないんだ。問題が、その問題が、その問題を乗り越えるための潜在能力を命から引っ張り出す働きをする。まあ、だから、自分自身としては、自分で引っ張り出したっちゅう気持ちがないもんだから、ああ、できちゃった。ああ、なんや、そういうことかと、そういう気持ちになってね、で、あとからなんでこんなことができたんだろうと考えてというような、そういうことになってきてですね、問題を乗り越えたとき、ああ、できちゃった。ああ、乗り越えられちゃったというね、そういうこの感じで、この湧いてくるわけですよ。ああ、そうかという感じなの。自分で考えたんじゃない。湧いてくるから、ああ、そうかなんですよ。それがこの宇宙とつながった命が問題を乗り越えさせてくれるというね、まあ、そういう状況なんですね。だから、本当に、本当に命が宇宙とつながるという状態、自分が命と、自分が宇宙とつながるというふうな状態に、このなりたいと思ったら、理性の限界に挑戦せんないかん。理性能力でいろんなことをやってみてなんともならんという状況になって諦めたらいかん。そこから本番に入るんですよ。**

**理性能力っちゅうのは、他人がつくった知識や技術を覚えて自分が使ってるもんです。これは他人のもんですからね。パクリや。他人がつくった知識や技術でなんともならん状況に陥って、だけど、なんとかしたいと思って頑張ってると、本当の俺の力が湧いてくる。その本当の俺の力っちゅうのは、お母さんが生まれながらに人間に与えてくれた力だ。それを潜在能力というんですよね。で、潜在能力というのはどこに潜在してるんですかっちゅったら、染色体の中にある遺伝子が潜在能力なんだ。遺伝子は生まれながらにその人に与えられてるんだ。しかも、それは人類に与えられてる力が、この遺伝子の中、染色体の中にある遺伝子だ。人類に与えられておる遺伝子というね、この潜在能力が湧いてくる。だから、その人は個の限界を超えて、類の単位の仕事ができる。知恵が湧いて、気付きが湧いてくる。潜在能力が湧いてくれば、その人は理性という個の限界を超えて、類の単位の、類のこの価値を持った、そういうこの仕事ができるわけですね。それがその宇宙とつながった命というものが持っておるですね、素晴らしさであります。**

**だから、本当にね、宇宙とつながるというような、そういうこの命の状態になった人というのは、みんなね、本当にこれが俺の人生の地獄かと言われるようなね、そういう苦しみをね、越えてきてるんですよ。だから、ビートたけしさんなんかでもね、あのバイクに乗ってひっくり返っちゃってですね、顔がぐちゃぐちゃになっちゃってという事故の前は、ほとんどそうべつに大した人間じゃなかったんですよ。だけど、そのバイクの事故から生還してですね、死んじゃうところを戻ってきてですね、助かっちゃってから、急に映画監督になったりなんか、すごいことをやり始めたんですよ。あれは命が宇宙とつながっちゃったからですね、自分のこの作為的なね、理性でやってきたそういうこの仕事ではない、本当にもうこの類の単位のね、力が湧いてきてね、それで世界的な活躍ができるという状況になったんですよ。だいたい、そういうレベルの人というのは、みんなね、大病をしてね、で、死に外れにあって生還したとかね。まあ、本当にね、そういうこの、まあ、人生の地獄というものを体験しながらも、このままでくたばってなるものかっちゅうんでね、はい上がってきたというね、そういう状態の人が、いろんなね、大きなこの価値ある仕事をそれからするということになってくるのが多いんですよね。**

**まあ、とにかくはね、この仕事上においても、人間関係においてもね、家庭生活においても、いろいろ問題があるでしょうけどね、それは全部ね、この自分を成長させるために自分の命をですね、宇宙とつながって、そして、その宇宙とつながった状態にして、自分の命を輝かせるためにね、自分を成長させるために、自分を本当の素晴らしい生き方を自分にさせてくれるために、そういう問題は出てきてくれてるんだというね、まあ、そういうこの気持ちを持ってですね、その問題に負けてしまわないでね、なんとかその問題を乗り越えていって、本当の俺の力を命から引っ張り出そうというふうな、そういう気持ちにですね、われわれはなって生きなければなりません。まあ、とにかく出てくる問題から逃げたらいかん。問題こそ愛なんだ。苦しいけど、愛なんだ。実際でも、愛は苦しいですよ。恋は楽しいですけどね。だけど、人を愛するっちゅうことは苦しいことですよ。だから、みんな愛に悩むんですよ。努力せんと、愛は存在しませんからね。愛は努力なんですから。相手のためにどの程度の努力ができるかっちゅうことが愛なんですよ。また相手が自分をどの程度愛しておるかっちゅうことは、相手がどの程度、自分のために自己犠牲的努力を払ってくれるかということが、どの程度、相手が自分を愛してるかっちゅうことの、この見極めですからね。相手のために努力する気持ちがなくなったら、愛はうせたんだ。なくなったんだ。相手のためにどの程度、努力する気持ちがあるか。それが自分がその人をどの程度愛しておるかを決めるわけですよね。愛の実践的原理は努力だ。**

**問題、苦しみ、悩みというのは、自分を成長させるために出てきてくれてる。そのために努力をする。それは母なる愛の期待に応えるというですね、そういうこの愛の努力だ。問題は愛なんだから、その問題を解決するために努力することは、母なる宇宙の期待に応えようとする、子なる命のですね、この本当の子どもとしての親への愛のですね、この証明というかね、証であるというふうに言うことができる。まあ、これは単にこの人間性の深さ、人格の深さをつくっていくという、この課題のためだけではなくってですね、さまざまな問題を乗り越えて生きなければならないですね、すべての人間の人生に関わる根本のですね、この重要な原理であります。問題から逃げたらいかん。問題は愛だ。自分の潜在能力を引き出してくれるために、あらゆる問題が出てきてるんだ。世界にいろんな問題があるわけですけど、問題というのは、誰かこの問題を解決するやつはおらんか。問題はその問題を解決する人物、探し求めて出てきてるんですよね。問題があるが故に、われわれは使命を持って生きることができる。価値ある人生を生きることができる。問題を解決した人が、価値ある人生を生きたということになるわけですからね。問題がなければ価値ある人生はありません。**

**その意味で自分の問題だけではなくってですね、その業界の問題や社会の問題や、また人類の問題に対してですね、俺がなんとかしたろうやないか。これは愛なんですよね。問題に向かって立ち上がっていくのは愛なんですよ。誰かが苦しんでおったならば、他人事にしないで、他人の苦しみをわが苦しみとして感じてですね、かわいそうにな、なんとかしてあげたいな。これがこの感性の働きなんですよね。他人が苦しんでるのを見て、あれは他人事やと、俺に関係ないわ。それは理性なんですよ。だけど、感性が本当に働いてる人間というのは、他人が苦しんでると共感してしまって、かわいそうにな。相手の苦しみを、わが苦しみとして感じてしまってね、相手の苦しみを、相手の悲しみを、わが苦しみ、悲しみとして感じてしまって、なんとかしてあげたいとこう思ってしまうのね。そこから、その問題に向かって立ち上がって、なんとかしてあげようという、そういうこの愛あるね、この活動がこう出てくる。まあ、それを使命というんですよね。問題は自分の命の使いどころを教えてくれてる。自分の命の価値ある使い方を教えてくれてる。問題があることによって、価値ある人生を生きることができる。とにかく問題を乗り越える努力をする。問題には必ず答えがあるんだから、答えがないことはないんだから、必ずその問題にぶつかっていって、成長できるんだから、だから、問題から逃げないで、それは自分を成長させるために出てきた問題なんだ。ここでくたばってなるものか。自分自身としてはそういう思いでですね、あらゆる問題に立ち向かっていかなければなりません。**

**また会社においては、会社全体を組織として向上させようと思ったら、みんながですね、そういうこの一人の人の課題に対して、みんながいろいろ知恵を出し合って、その人がつぶれないように、その人が成長できるように、こうしてみたらどうや、ああしてみたらどうやと言って、他人事だからね、いろいろアドバイスができますよ。そういうふうにして、その人に立ち上がる力を与えてあげる。まあ、それがこのチームワークとしてのですね、会社の団結力というのをつくっていくことになります。お互いにこう教え合いながらですね、営業力を高め、また仕事のこの質なりですね、レベルを向上させていく。みんなが向上しないと、その会社の仕事のレベルは上がっていかないんですよね。一人勝ちで、一人が立派でもね、その会社は立派になりません。みんなのレベルが上がっていって、その全体としての仕事がですね、この評価されるようになってくるので、一人だけ立派でも駄目なんです、会社はね。みんながお互いにお互いを高め合う。そういうこのチームワークというか、パートナーシップというかね、そういうこのかたちで、お互いにこう助け合って、教え合って、成長させ合ってという、そういうかたちで、みんながレベルアップしていかないといい仕事にはなりませんし、いい仕事はできません。他人の問題だったら、よく見えるんですから、まあ、その人が苦しんでおったら、こうしてみたらどうや、こういうものもあるよ。いろいろ教えてあげてですね、みんなでその人を支えてあげて、共にこの成長していくというね、まあ、そういうこの会社のあり方というのを、ぜひですね、この考えてみてもらいたいと思います。ということで、今日はこの人格の深さをつくるというね、話をさせてもらいました。どうもありがとうございました。**